桜井谷窯跡群
2－19窯跡・2－24窯跡

—北豊中団地建設にともなう確認調査—

1977.3

桜井谷窯跡群発掘調査団

は　じ　め　に

各種開発技術の進歩にはめざましいものがあり、一夜にして山を削り、谷を埋め尽すことも不可能ではないという現代、一方では生活環境の悪化とともに自然保護の必要性がさけばれ、埋蔵文化財についても社会的な関心が高まってまいりました。

桜井谷窯跡群については、大正4年笠井新也氏によって“摂津桜井谷製陶遺跡„として紹介されて以来60年を経過しました。この間における桜井谷地域の変化は、非常に大きなものであり、これにともなって数多く知られていた窯跡は激減して数個所を確認するのみとなってしまいました。

このような現状の中で今回、日本住宅公団により北豊中団地が建設されることとなり、同公団と大阪府教育委員会・豊中市教育委員会の間で長年にわたる協議が行なわれてまいりました。この結果、北豊中団地内に含まれる2個所3基の窯跡は保存されることになり、本調査を実施することができました。

今回の調査については、日本住宅公団・大阪府教育委員会・豊中市教育委員会の援助のもとに、調査を補助していただいた方々および多くの学生諸君の協力により、無事終了することができました。ここに記して感謝の意を表します。

昭和52年3月

桜井谷窯跡群発掘調査団

団長　　鳥越憲三郎

例　　言

1．本冊子は、日本住宅公団北豊中団地建設にともなう埋蔵文化財確認調査の報告である。

2．本確認調査は、日本住宅公団より桜井谷窯跡群発掘調査団が委託を受けて実施したものである。

桜井谷窯跡群発掘調査団

団　　長	鳥越憲三郎	大阪教育大学教授・豊中市文化財保護委員
調査指導	瀬川　芳則	枚方市文化財研究調査会顧問・大阪経済法科大学講師
調　査　員	島田　義明	豊中市教育委員会文化財担当職員
	三宅　俊隆	枚方市文化財研究調査会調査員
調査補助員	厚美　正子・橋本　正幸・谷川　博史・木下　亘	

3．本冊子の作成については、Ⅲ－１及び２を三宅が、Ⅳ出土遺物一覧表を厚美が、その他を島田が執筆し、鳥越・瀬川が稿正した。図版の作成には、島田・厚美・橋本があたった。

4．調査の進行および出土遺物の考察について、藤澤一夫先生（四天王寺女子大学教授・豊中市文化財保護委員）・藤井直正氏（大手前女子大学講師）より指導および助言を受けた。

5．調査の実施にあたり、東海興業北豊中作業所の協力を得、中でも所長宮内宏忠氏より多大の援助を受けた。

6．調査についての事務処理には、日本住宅公団関西支社団地住宅才四課計画才一係長橋口繁氏・豊中市教育委員会社会教育課課長冨田喬氏・同文化係長佐々木修治氏があたられた。

7．調査終了地域については、北豊中団地内に２個所の保存緑地帯として保存処置がとられている。

目　　次

Ⅰ　調査の経過 …… 1
Ⅱ　窯跡の位置 …… 2
Ⅲ　調査の記録 …… 3
1．　２－19窯跡 …… 3
調査日誌抜すい・窯の構造
2．　２－19－２窯跡 …… 7
3．　２－24窯跡 …… 8
調査日誌抜すい・窯の構造
Ⅳ　出土遺物 …… 14
２－24窯跡出土遺物一覧表・２－19窯跡出土遺物一覧表・
２－19－２窯跡出土遺物一覧表
Ⅴまとめ …… 30

挿　図　目　次

第１図　窯跡の位置
第２図　登り窯模式図
策３図　２－19窯跡実測図
第４図　２－19窯跡灰原断面図
第５図　２－19・２－19－２窯跡地形測量図
第６図　２－19－２窯跡遺物出土状態
第７図　２－19－２窯跡実測図
第８図　２－24窯跡後方切落断面
第９図　２－24窯跡実測図
第10図　２－24窯跡地形測量図
第11図　２－24窯跡Ａ地区灰原断面図
第12図　２－24窯跡出土遺物
第13図　２－24窯跡出土遺物
第14図　２－24窯跡出土遺物
第15図　２－19窯跡出土遺物
第16図　２－19窯跡出土遺物
第17図　２－19窯跡出土遺物
第18図　２－19－２窯跡出土遺物
第19図　２－19窯跡出土遺物
第20図　杯における大きさの比較
第21図　中世遺物
第22図　ヘラ記号文および文字拓本

図　版　目　次

図版１　発掘調査区域全景
図版２　２－19窯跡灰原分布地域
図版３　２－19窯跡窯体の状態
図版４　２－19窯跡灰原の状態
図版５　２－24窯跡Ｂ地区窯体・前庭部の状態
図版６　２－24窯跡Ｃ地区窯体後方部の状態
図版７　２－24窯跡Ｃ地区窯体の断面
図版８　２－24窯跡Ａ地区灰原の状態

I　調査の経過

今回の窯跡発掘調査の経過は昭和46年にはじまる。昭和46年８月13日、日本住宅公団関西支社より大阪府教育委員会あてに、北豊中団地建設にともなう用地買収・計画立案について予定地内における埋蔵文化財の分布確認の依頼書が提出された。この依頼にもとづいて、大阪府教育委員会は豊中市教育委員会立会のもとに、周知の遺跡についての現地確認を行なった。予定地内に含まれる遺跡は、この付近全体が桜井谷窯跡群の分布地域に含まれることから、このうちの19地点・24地点の窯跡である。大阪府教育委員会は、この結果にもとづいて昭和46年８月30日付の書類をもってこの窯跡地点の保存についての報告を行なった。

日本住宅公団北豊中団地については、その後建設のための準備が進められ、昭和51年４月になってマスタープランが決定され、豊中市教育委員会に提出された。このマスタープランでは、用地内２箇所の窯跡にともなう土器散布地を保存緑地帯に含んで現状保存することが明示されていたが、その保存方法については多少の問題があった。すなわち２－19窯跡では斜面前面の灰原部分がかなり埋め立てられること、２－24窯跡では斜面前面が削り取られるためにもとの地形が変更されてしまうことや、後方道路が接近しすぎていることなどである。このような状態の中で協議を進めた結果、両窯跡は窯体部と前面の地形を極力保存することとし、下方に分布する灰原の記録と窯体部の位置確認のための発掘調査を実施することになった。

調査前の経過は以上のようであるが、昭和51年９月20日、発掘用の諸機材を搬入し、同11月10日までに発掘調査および調査個所の埋めもどしを行ない調査を終了した。

２－24窯跡については、後方道路の接近問題が残っており、調査中も協議を進めた。発掘調査によって窯体の保存状態が当初予想した以上に良好なこともあり、後方道路の位置とは相入れない状態であることが確認された。

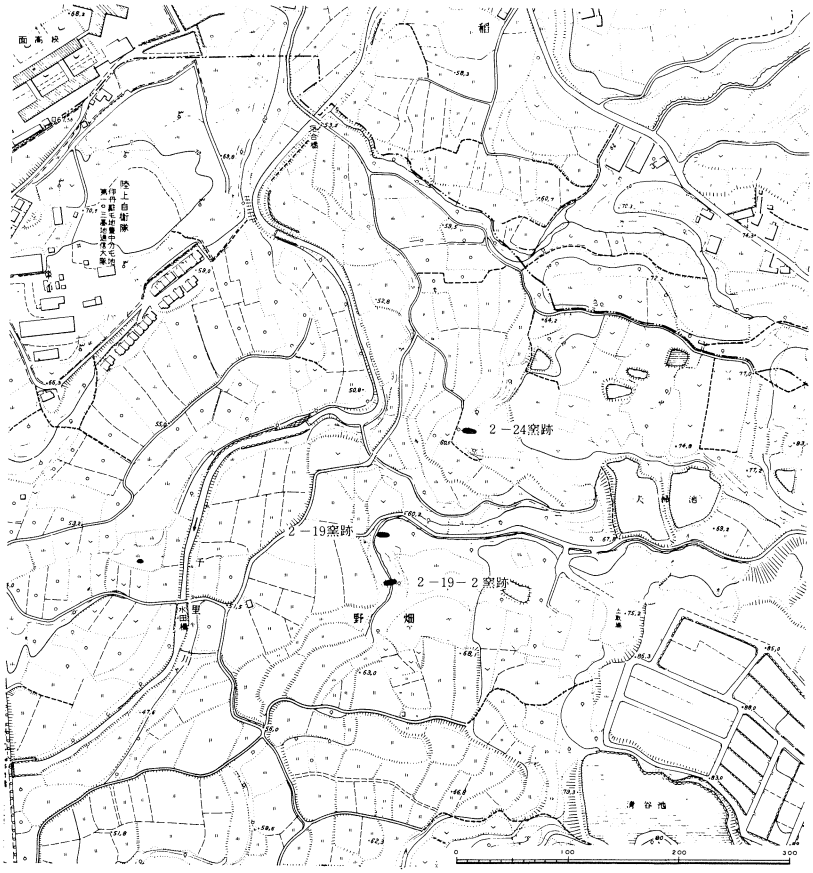
緑地帯の保存計画は窯跡上方の平担面を全体に７m削り落とす大きな変更であり、窯跡地区は周りの平担面に島状に取り残された形をとるものである。このような状況であり、保存地区の前面は自然地形の勾配を保つが、後方は窯焼成部後端から垂直の落差をもって道路面となり、将来への保存を考えれば土砂流失によって窯体の露出ということも憂慮される状態である。しかし、協議においては良い結果が得られず、道路ヨウ壁の積上げなどの設計変更を取り付け、窯体の一部を切り落とす不運な調査を実施することとなった。調査

は２－24窯跡Ｃ地区窯体部後方1.5ｍを切り落とすもので、昭和52年３月８日から12日までの５日間に実施した。

以下調査細目については、各窯跡の項で日誌をもって記録する。

II　窯跡の位置

桜井谷は幅約500ｍの大きな谷であり、窯跡群はこの谷の両岸約３kmにわたって豊中・箕面市に続いて分布している。東岸に位置する２－19・２－19－２・２－24窯跡はこの群内でも北部にある。標高70ｍの段丘面を切りこむ夫婦池支谷は幅約80ｍの谷で、窯はこの谷の出口の主谷に面した両端突出部の地形を利用して築かれている。同じ段丘斜面を利用して築かれた窯であることから、これらの窯は標高65ｍ前後の等高線上に位置している。



第１図　窯　跡　の　位　置

Ⅲ　調査の記録

1.　2－19窯跡

調査日誌抜すい

9月20日　機材搬入。住宅公団・豊中市教育委員会・調査団・東海興業の4者による現地確認を行なう。

9月21日　調査地区の立木伐採開始。台風17号による地山崩壊部に露出した窯体を記録する。

9月24日～26日　灰原の露出断面の調査。窯体の規模確認のため三ヶ所にトレンチを設定する。

9月27日　灰原の範囲内の立木伐採を行ない、灰原調査のための地区割(2m×2m)を行なう。

9月29日　灰原断面の実測を行なう。

10月1日　間壁忠彦氏見学。

10月4日　2－19－2窯跡の残存状況を調査し、遺物を検出する。

10月5日～7日　2－19－2窯跡の規模を確認するためにトレンチを設定したが、すでに大部分が崩壊しており、確認できなかった。

10月10日～15日　2－19窯跡は灰原の調査を続行、灰原の縦断面の実測、写真撮影を行なう。豊中一中生の応援。

10月16日　斜面下水田にトレンチを設定し、遺構の有無を確認する。遺構なし。灰原縦断面の遺物堆積状況を記録する。藤澤一夫氏の助言を受ける。

10月21日～24日　灰原調査終了。窯体にトレンチを設定し、横断面の実測を行なう。

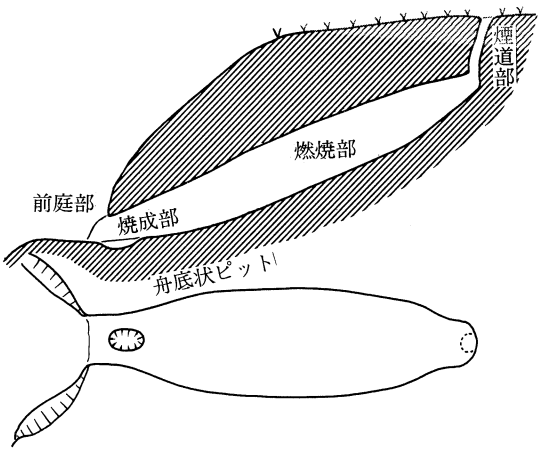
10月25日　窯体全景の写真撮影を行なう。

10月29日～2日　地形測量を行なう。

11月3日　窯体の平面実測を行なう。

11月6日～9日　窯体の床および壁を断ち割り窯体の構造・構築法を観察し、断面実測を行なう。

11月11日　機材および出土遺物を搬出し、発掘現場作業を終了する。



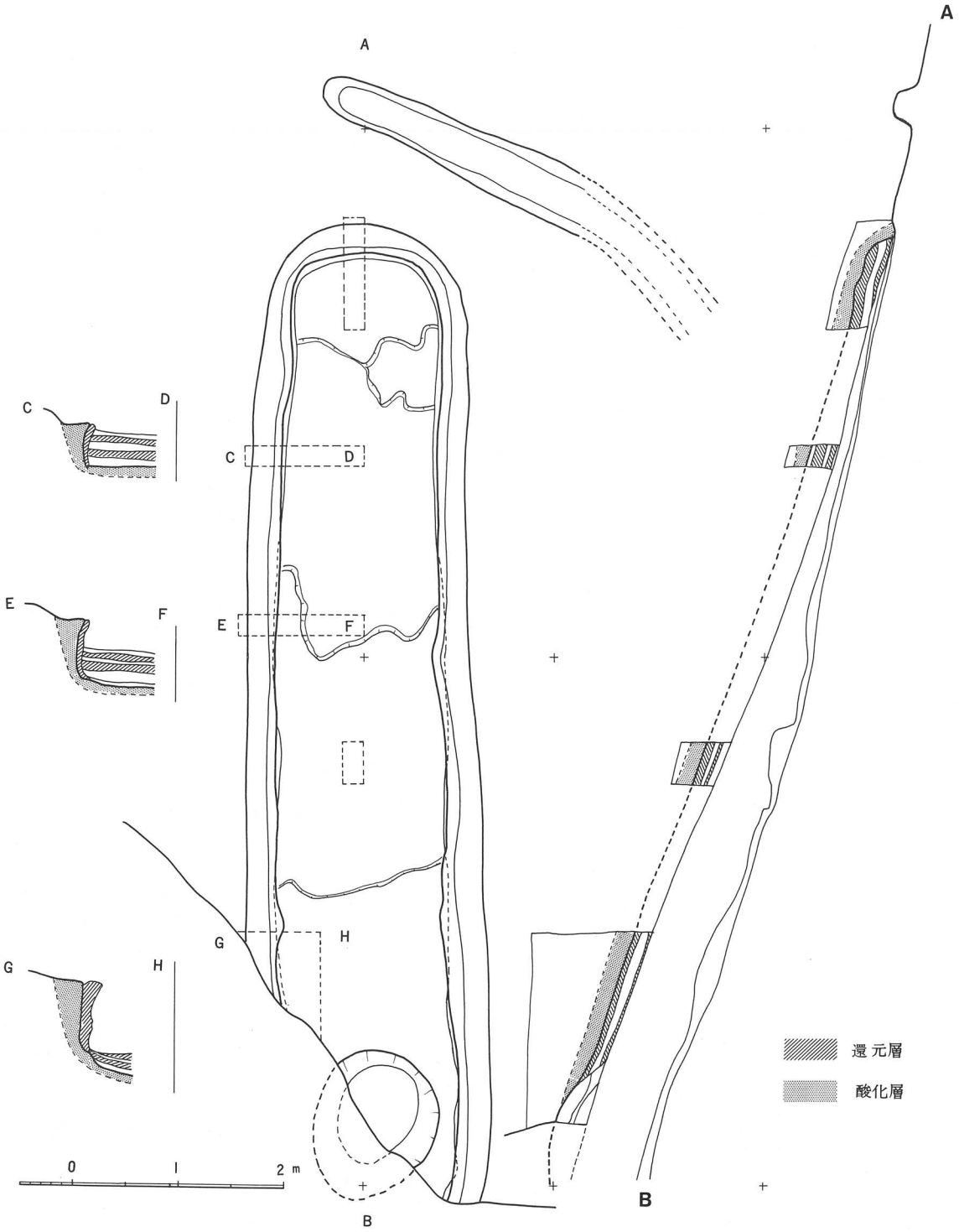
第2図　登り窯模式図

窯　の　構　造

標高約60～64ｍの丘陵斜面に直交し、Ｅ－5°－Ｎを主軸として構築された窯である。調査前すでに窯体が水路山側の断面に露出していたが、台風17号の影響で丘陵北側の一部が大きく崖状にえぐりとられ、窯体前端の一部が崩壊した。窯体は焚口・燃焼部の一部、またこの前面の前庭部が斜面中腹を巡る用水路敷設時に壊されていた。天井部・奥壁・煙道部などは丘陵突端の頂上部に位置しているために、すでに失われていたが、窯体左右の壁と床面が残存しており、ほぼ構築当初の規模や構築法などについての資料を得ることができた。これによると、残存長は床面主軸線上で約9.5ｍ（斜面長）を計る。付近は松や雑木林となっており、調査後は窯体とともに緑地として保存されることになっているため、調査はこの条件にそった方法で実施した。

焚口・燃焼部　前庭部・焚口はすべて壊されているが、位置は推定することができる。それからみると燃焼部は約2.5ｍ前後のものであると推定され、この幅は前端で約1.6ｍを測る。この付近の床面傾斜は15°～16°である。燃焼部床面中央に、長径約1.3ｍ（推定）・短径約1.0ｍ（推定）・深さ20～30cmの楕円形の舟底状ピットを検出した。このピットを断面で観察すると、上面は２枚の床で閉されており、この下の床で開口していた状態であり、構築時から約３枚の床面までの時期にその機能を有していたものと考えられる。またこの内部は一部で層をなし、黒色の灰は混入せずすべて砂層で構成されていた。側壁は主軸線を中心にして、左右ほぼ対称であり、燃焼部の左側壁は全く失われている。側壁は還元層（約10cm）と酸化層（約10～20cm）からなり、やや内傾しているがしっかりしている。窯壁は地山礫層を掘りこんで、直接スサ入り粘土を貼り付けてつくったもので、その表面には粘土を貼つた際に付着した指の痕跡がよく残っている。

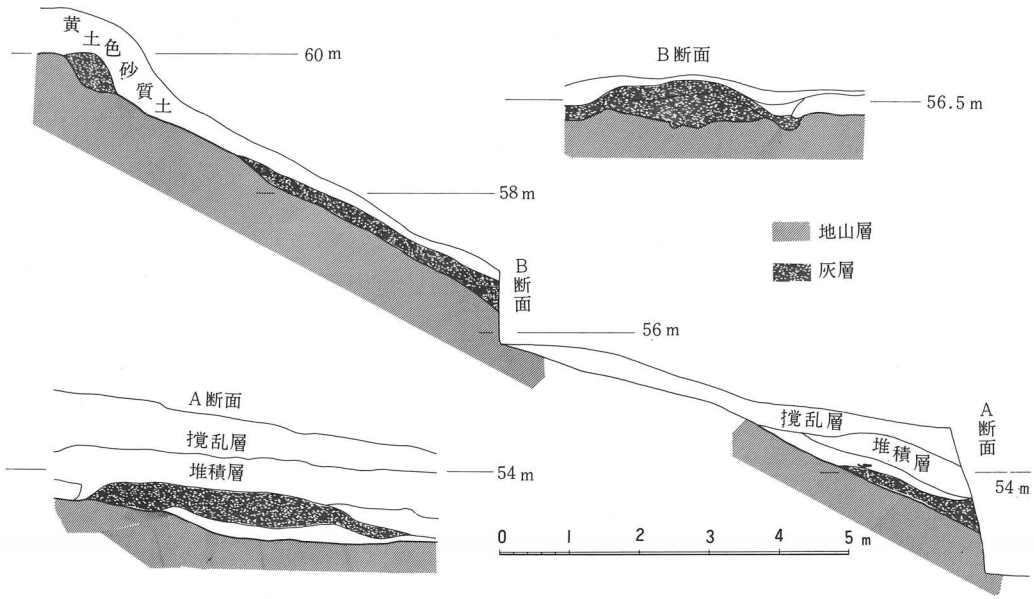
焼成部・煙道部　焼成部床面残存長は約7.5ｍである。床幅は約1.5～1.8ｍで中央部が広く、奥になるほど狭くなっている。床の断面を観察すると５～７層を数え、傾斜変換部においては５層、中央部で６～７層、奥部では５層にわかれているのが確認された。最上面の床は青灰色に還元して焼けているが、残存状態があまり良いとはいえない。すなわち、わずかな断ち割り方法による断面観察なので、床面の正確な枚数ははっきりしない。しかしながら場所によって上記のような状況で分層しているのが確認できたわけである。床面の焼け具合は奥の方ほど還元層が薄く、全体にもろくなっている。傾斜変換部から中央にかけての床面は平面的にのび、傾斜角度は20°～23°をはかる。また



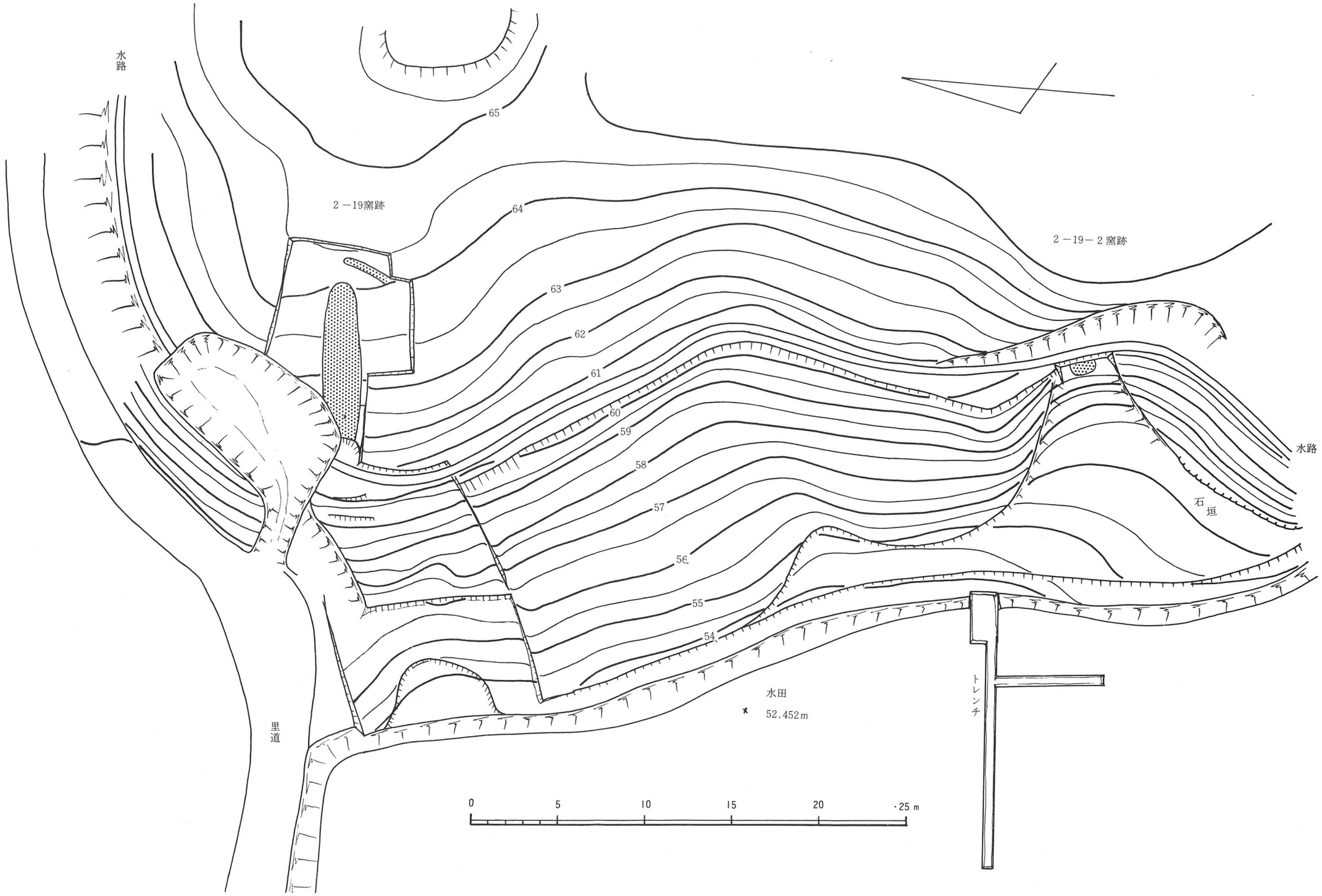
第3図　2－19窯跡実測図

その部分から奥壁にかけての床面はそり気味となり、その傾斜角度は13°～16°である。また断面観察によると、床面は砂層と黒色灰層が何層にも重なっている。このことから、焼成の度ごとか、あるいは何回かおきかに細かい礫を含む砂と、スサ入り粘土を混ぜて床面全体に敷きつめて床を補修したものと考えられる。しかし、これによって正確な火入れの回数を知ることは難かしい。側壁はかなりよく残っており、最も残りのよい部分では高さ約80cmをはかる。壁は焚口・燃焼部と同じく還元層（約10cm）と酸化層（約10～20cm）からなり、還元部分はスサ入り粘土の貼り壁である。また壁面のところどころに粘土を貼り付けた際の指の痕跡も認められた。側壁のところどころに検出した径３cm程の小ピットには、材木の炭化したものらしい炭がつまっており、天井部を構築する際の木組みの残痕ではないかと考えられた。なお、燃焼部と焼成部の境界部の両側壁付近では、少量の須恵器片を検出した。

煙道部については、すでに消失してしまっており、何らの痕跡を認めることができず、窯体の奥壁部が床面よりわずかながら高く隅丸になって輪郭をとどめているにすぎなかった。奥壁部から真すぐ東上方約１ｍのところに、窯体南側の斜面に沿って１本の排水溝が設けられているのをわずかながら検出した。幅40～50cm・深さ約20cmの溝で窯体の保護を



第４図　２－19窯跡灰原断面図



第5図　2－19・2－19－2窯跡地形測量図

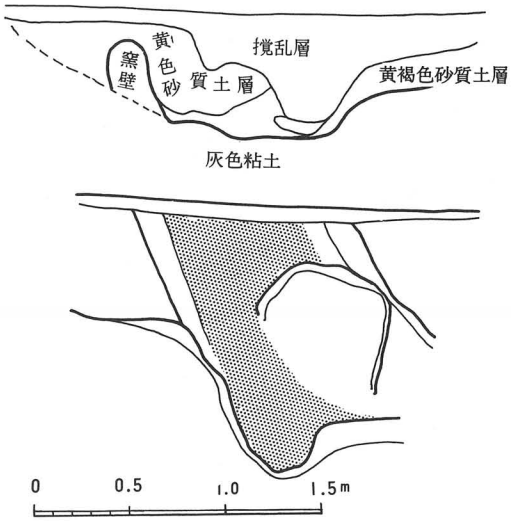
目的として掘られたものであると考えられる。

灰　　原　前庭部・焚口付近と考えられるところから、窯体主軸よりかなり右側に偏って、丘陵斜面の下方に扇形に広がっている。灰原の範囲は丘陵裾部の広いところで南北7.5mである。層位は断面で観察するかぎり炭化層の厚さは厚いところで約70cm、薄いところで約20cmで、時期的な分層は認められず、したがって窯の使用期間も短いものと考えられる。調査以前に、丘陵中腹の斜面を削平して作業小屋を建設していたらしく、その時すでに灰原の一部が削りとられ断面に露出していた。さらにもう一箇所丘陵裾部と水田との境の畦斜面に灰原の断面が露出していて、この付近で灰原はわずかに水田地にもぐる様相を示すと同時にほとんど終わってしまう。旧地形の丘陵斜面がもともと凹凸があり、自然に凹地に灰や遺物が推積し灰原が形成されたようである。

2.　2－19－2窯跡

この窯は、2－19窯と同丘陵に存在し、約40m南寄りの標高約59mに立地する。しかし、ながら、窯壁らしき焼土と床面らしきもの、それらの真下方で厚さ約1cmの灰原のようなもの、および須恵器を検出したことにより、ようやく窯であることが判明したのであったため窯の規模や構造を知ることができなかった。この付近はもと丘陵かもう少し西方へ舌状に突き出し、登窯の構築には最適であったであろうということが地形実測によって明らかになった。しかし地層が安定していなかったため崖崩れがおこり、その時に窯も壊れ、窯に残存していた須恵器も生焼けのまま埋まったものであろうと推察される。
以上のような結果から、2－19－2窯は使用されていた最中に壊れた可能性も考えられる。

第6図　2－19－2窯跡遺物出土状態



第7図　2－19－2 窯跡実測図

3.　2－24窯跡

調査日誌抜すい

9月27日～29日　窯体周辺部雑草・雑木伐採。樹木は保存緑地帯のため残す。

9月30日(木)晴　A・B・C地区の設定、A(地)区・下方断面を削り灰原の確認を行なう。約15m幅の広がりが認められる。B(地)区・トレンチ掘りで窯体の一部を検出、灰原の中心より北にずれている。

10月1日(金)曇　A区・灰原の地区割(A－1～A－8)を行なう。B区・表土剝ぎを行なう。

10月2日(土)曇　A区・豊中一中社会科クラブメンバーにより表土剝ぎ(A－1・A－2)、B区・南半部の表土剝ぎ。窯体の輪郭を確認する。

10月3日(日)晴　A区・A－1・A－2表土剝ぎ。B区・北半の表土剝ぎ。北半水路に面して凹地があり厚さ30cmの灰原が認められる。

10月4日(月)晴　A区・水路下方の提をはずす。B区・窯体の輪郭を出し、一段掘り下げ、天井落下状態を記録する。

10月6日(水)　C区・幅60cmの2本のトレンチを設定。窯は上方へ伸びていることが確認された。上方トレンチ(C－2)の側壁は高さ10cm位の遺存状態である。

10月7日(木)　C区・下方トレンチ(C－1)を掘り下げる。遺存状態は良好であり、窯幅2m・側壁高80cmをはかる。C－2を拡張する。窯体は切れ、煙道部は遺存していない。

10月8日(金)曇・時々雨　C区・C－2拡張区の整備、午後遺物整理。

10月10日(日)　B区・焚口部の調査を行なう。焚口部に黒色灰層が認められるため、十字畦を残し掘り下げる。灰層は深さ10cmで焼土層となり、この下より大甕がまとまって出土した。大甕の下はまた黒色灰層である。

10月11日(月)　灰原・床面の状態からみれば窯は2重あるいは3重になっている可能性がある。

10月12日(火)　A区・表土剝ぎ終了。灰原は窯体との関係で分層する必要があるためA－2・4・5・7に幅30cmのトレンチを掘る。

10月13日(水)　A区・各トレンチには灰原が認められるが、A－4トレンチが最も厚い堆積を示す。

10月14日(木)　A区・A－7灰原を掘り下げる。分層は不可能である。

10月15日(金)　B区・焚口の大甕の清掃・写真撮影・実測。焚口前の灰原をトレンチ掘りする。2本の溝状の落ち込みがあり、前庭部が良好に遺存している。

10月16日(土)　A区・灰原はA－3・A－4で最も厚く堆積しており、厚さ70cmを越える部分もある。B区・焚口の大甕は下層窯(第2号窯)にともなうものである。焚口前の排水溝はA－3・4方向に伸びている。

10月18日(月)　B区・大甕はさらに奥に続いている。

10月19日(火)　B区・焚口の南に凹地があり、濃い灰層の中に焼台に使ったと考えられる焼け石がかなり含まれている。

10月21日(木)　B区・焚口前は前庭部となって扇形に広がる。この左右に凹地があり、左右対象の地形がみられる。

10月22日(金)　A区・灰原がA－8・9に伸びる可能性があり、拡張したが検出されなかった。灰原は南側に多く、北側は凹地の部分に堆積しているにすぎない。

10月23日(土)　A区・灰原東西断面の実測。灰原は本日ですべて削り終わった。B区・実測図作成。

10月24日(日)　A区・灰原の畦を取りはずす。

10月25日(月)晴　B区・焚口の床面が不明瞭なため補足調査を行なう。C区・C－1断面図作成。C－1で第1号窯床面と第2号窯床面の切り合い個所が検出された。

10月26日(火)晴　B区・第2号窯床面下の灰層は舟底状ピットと考えられる。C区・実測完了・一部埋めもどしを行なう。

10月27日(水)曇　B区・断面図等実測図の補足、午後全体の地形測量を行なう。

10月31日(日)　実測図の補足を完了し、調査を終了する。

11月10日(水)　埋めもどし作業を行なう。

第8図　2－24窯跡後方切落断面

窯の構造

2－24窯跡の発掘調査は、窯体部の保存が決定されているため、灰原部分の全面発掘と窯体部の位置の確認、その規模と構築法についての資料を得る、という点に主眼を置いて実施した。これらの主旨に添って発掘調査のために全体を露出させた部分は、灰原斜面・窯体部斜面・窯体部焚口5mと煙道部付近2mであり、窯体部中間部分は発掘を行なわずに現況のまま保存処置をとった。

窯跡の所在する斜面下はもと水田であり、現在まで植木畑として利用されてきた。この

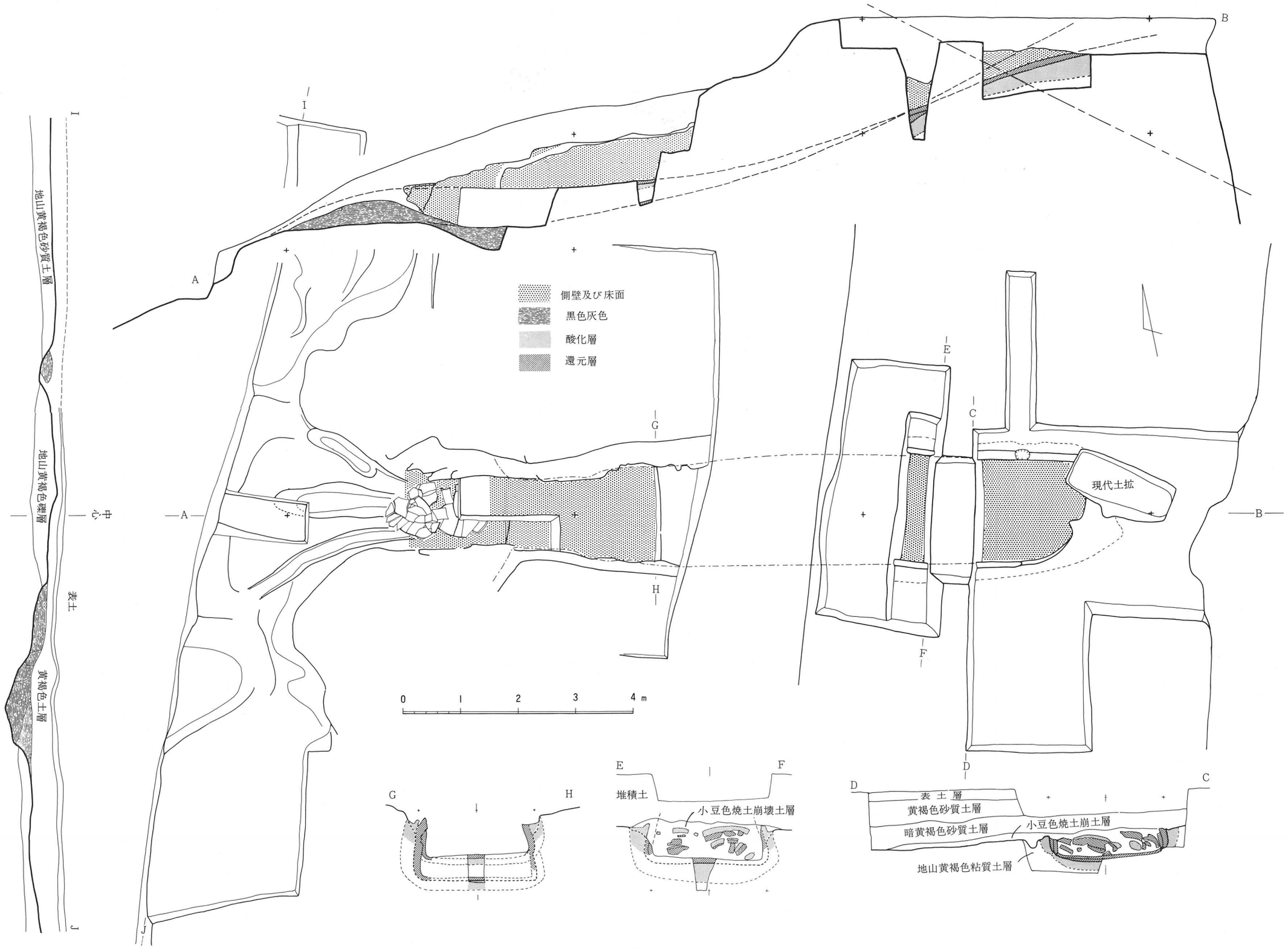
畑の山側は高さ約１ｍの壁面となっており、この部分に須恵器・窯壁魂などを含む灰原が露出している。この壁面から斜面が５ｍつづいて等高線方向に流れる幅約１ｍ・深さ約１ｍの農業用水路が掘りこまれている。灰原は主としてこの水路と畑壁面の間の斜面にみられるもので、この地区をＡ地区とした。Ｂ地区とした部分は水路より上方の部分で、窯体下半部・前庭部などの検出された所である。この斜面は25°～30°のゆるやかなもので８ｍつづいて、再び壁面となり、この上方が平担面となる。Ｂ地区上方の平担面は畑として利用されていた所で、この部分をＣ地区とした。Ｂ・Ｃ地区は窯体を中心に調査を行なったため、地区割の細分は窯体の南・北程度の大まかなものに止めた。Ａ地区は灰原部分であるため遺物の取り上げの地区細分を行なった。これは斜面に直交する２ｍ間隔のもので南よりＡ－１・Ａ－２……Ａ－８とした。１区割は約10㎡となる。

窯は当初単純な構造を予想して調査に入ったが、調査が進むにつれて複雑な構造を有するものであることが判明した。すなわち古い下層窯の天井落下後に新らしい上層窯を構築したもので、２面の床が検出された。この上層の窯を第１号窯とし、下層窯を第２号窯として記録した。

第１号窯　上層第１号窯の側壁は、第２号窯の側壁と重なっているため、窯の前端である焚口の正確な位置を判断することが困難であった。しかし表土の除去後すぐに検出された黒色灰の分布状態・床面と側壁の状態・側壁の高さなどから、第２号窯の焚口・前庭部が灰・焼土などで埋まり、天井落下後に焚口を約2.2ｍ後方（以下焚口方向を前・煙道部方向を後とする。）に移して構築・使用されていたものと考えられる。焚口の部分の幅は1.15ｍ、この部分での側壁の現存高は50㎝である。側壁は第２号窯側壁の上方に継ぎ上げた状態であり、第２号窯側壁還元層の上に貼り付けられた壁の厚みは約10㎝のものである。

焚口からの発掘部分は距離２ｍ（水平距離であらわす）あり、この部分に横方向のトレンチを設けた。トレンチにあらわれた断面の側壁は10㎝で、このうち還元層は５㎝をはかる。床面の還元層は７㎝、この下に第２号天井落下物が10㎝の厚さで酸化層を形成している。このトレンチより前方は燃焼部と考えられる所であるが、ほとんど水平に近い角度であり、床面の状態は砂・小礫などを敷いたような締りの悪いものである。

焼成部のほとんどは保存部分にあたるためその状態は不明であるが、煙道部に近い焚口より6.5ｍのＣ地区トレンチでは幅２ｍ・側壁現存高50㎝をはかる。この幅が焼成部の最大幅であると考えられる。発掘調査により検出した後端は、第２次調査により切り落とした

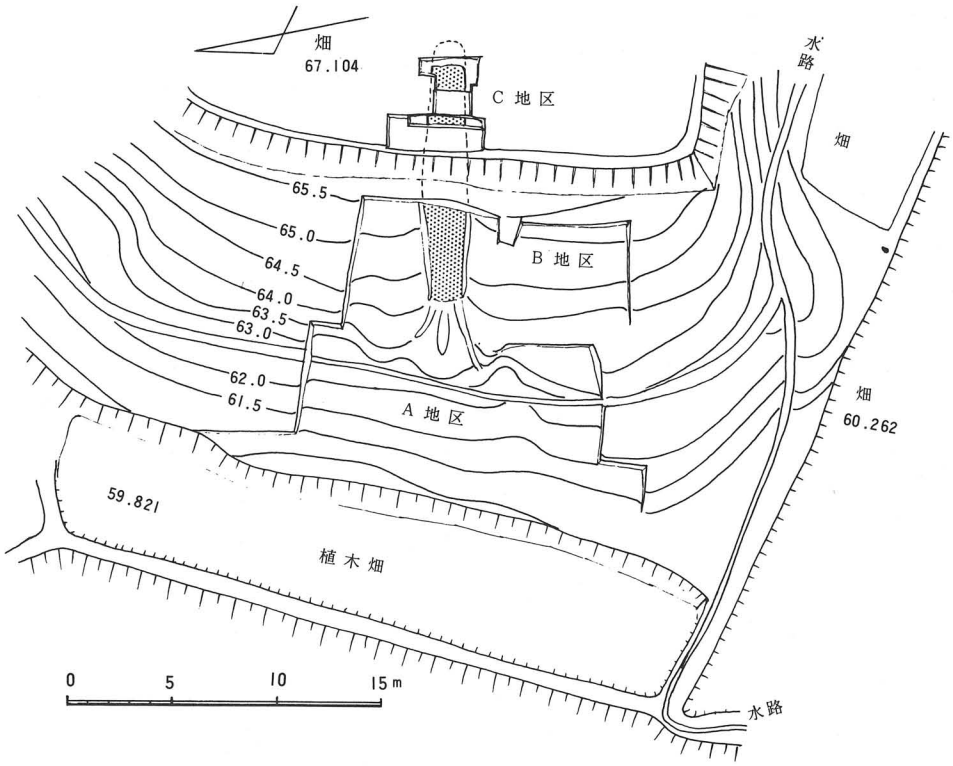


第9図　2－24窯跡実測図

1.7mで、これ以後は床面・側壁とも流失しており、奥壁および煙道部の状態は不明である。後端部においても窯体幅は２ｍであり、煙道部にかけて狭くなる傾向は見られないが、地形の状態からみて煙道部に接していた部分と考えられる。

第１号窯に関する出土遺物は焚口の前の黒色灰層に若干含まれていたが、窯体床面上ではほとんど検出されていない。

以上のように２－24第１号窯の現状数値は焚口より後端まで9.5ｍ・前後端比高2.3ｍ・斜面距離10.5ｍ・焚口幅1.15ｍ・最大幅２ｍのもので側壁は高いところで75cmをはかるものである。



第10図　２－24窯跡地形測量図

第２号窯　第２号窯は、第１号窯の下層にみられる古い時期の窯である。この窯体の調査については、窯体保存を決定されている本窯跡で、第１号窯を掘り抜いてまで全体を露出させることが望ましい方策であるとは考えられないため、部分的なトレンチにより全体の規模・構築法などの資料を得ることにつとめた。調査用のトレンチは、焚口右半部長さ2.5ｍと、窯体部横断トレンチ２本である。

第１号窯の焚口と考えられる部分より前方約2.2ｍに第２号窯の焚口がある。この部分での両窯床面の比高は70cmあり、第１号窯使用時には埋没していたもので、良好な状態で保存されている。高さ70cmで残っている側壁は右側で２枚、左側で３枚を数え、焚口部分の修理の多かったことを物語っている。壁の状態は赤褐色の酸化色をもつもので、１枚の厚さは15～20cmをはかり、表面に１cm程度の還元層がみられる。後方窯体部に近づくにつれて還元層の厚みは増し、4.2ｍ後方のトレンチでは約15cmの還元層と20cmの酸化層となり良く焼け締っている。焚口右半部のトレンチでは第２号窯の床面位以下に落ちこみがみられる。落ちこみの中は前庭部からつづく黒色灰層が主に堆積しており、深さ40cmで地山礫層となる。良好な床還元層のみあたらないこの落ちこみは舟底状ピットと考えられる。焚口前端幅は1.15ｍで少しずつ幅を増しながら燃焼部・焼成部に続いているものと考えられる。

焚口前方には良好な形で前庭部が検出された。前庭部の形状は、幅1.15ｍの焚口から前方に扇形に広がるもので、焚口から1.5ｍの地点で幅３ｍをはかる。平担面は焚口前方に２ｍつづき灰原斜面となるため、面積は4.7㎡程度のものであると考えられる。前庭部右端にそって幅30cm・深さ30cmの溝状の落ちこみがみられる。この落ちこみは焚口の舟底状ピットからつづいており、長さ約３ｍで灰原斜面に落ちるもので、排水の用を果たしていたと思われる。前底部には、これとは別に中央に幅60cm・長さ2.5ｍ・深さ40cmの落ちこみがみられるが、前端が斜面にまでいたっておらず、排水の機能をもつとは考えにくい。前庭部左端にも落ちこみがあるが、浅く細いもので、溝としての用途は考えられない。これらの溝や落ちこみは、同時に併存したと仮定した場合には作業場としての機能を無くさせるほど接近しているため、それぞれ別の時期・別の機能をもって掘りこまれたものと考えられる。

前庭部の溝や落ちこみの上には厚さ30cmの黒色灰層がみられたが、これらはその内部にも充満し、さらに落ちこみなどが続いている舟底状ピットと考えられる部分にも及んで堆積していた。この黒色灰層の上に、焚口と前庭部にかけて大型甕形土器が大きな破片として横転、押し壊された状態で出土した。これらは胴部下半の大半に複原され、同様な破片

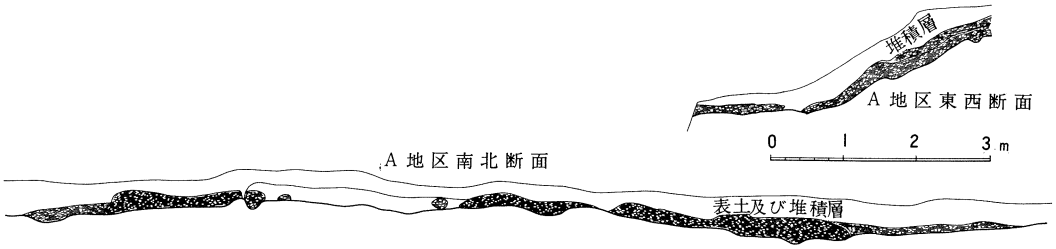
は焚口後方4.2mのトレンチ床面でも検出された。また、これらの土器片の上には赤褐色の焼土や天井などの崩壊土が直接堆積していることからみて、第2号窯はこれらの土器を焼成中に天井部の落下によって崩壊したのではないかと考えられた。しかし焼成部は保存処置の配慮から部分的な調査にとどめたこともあり、結論を得るに至っていない。

焼成部については、上記トレンチで幅約1.9mをはかる。床面の状態は良く焼け締った還元層である。C地区トレンチにおいて、第1号窯との間に切り合いが認められた。すなわち第2号窯の床面を第1号窯の床面が切っているもので、第1号窯の構築によって第2号窯焼成部上方および煙道部は断ち切られたものである。

以上のように、第2号窯は焚口より後方8.5mが遺存しており、現状ではこの前後端比高2m・斜面距離約9.1m・最大幅1.9mをはかり、当初はこれより長くつくられていたものである。

灰　　原　灰原はA地区においてその大半を占めており、一部がB地区前庭部の南北で検出された。A地区斜面の下方壁面に露出している灰原は窯体主軸に直交して幅14mにわたって分布している。最も厚く堆積していたのは、主軸右寄りのA－3・A－4地区である。この部分は、前庭部右端の排水溝の先端からつづく灰原斜面が大きく凹地になっており、同様な凹地は前庭部左側にもみられ、A－7地区でも比較的厚い灰層を認めることができた。

2－24窯跡では窯体が2重の構造になっているため、灰原についてもこれらを分層する必要があるが、灰原の分層をおこなうに至らなかった。かろうじて分層の実現したところは焚口から前庭部にかけての灰層と、A－3地区の凹地底付近に堆積した一群の土器を第2号窯のものとして抽出したにすぎない。他の地区では灰層の上下を別ける程度の結果となった。



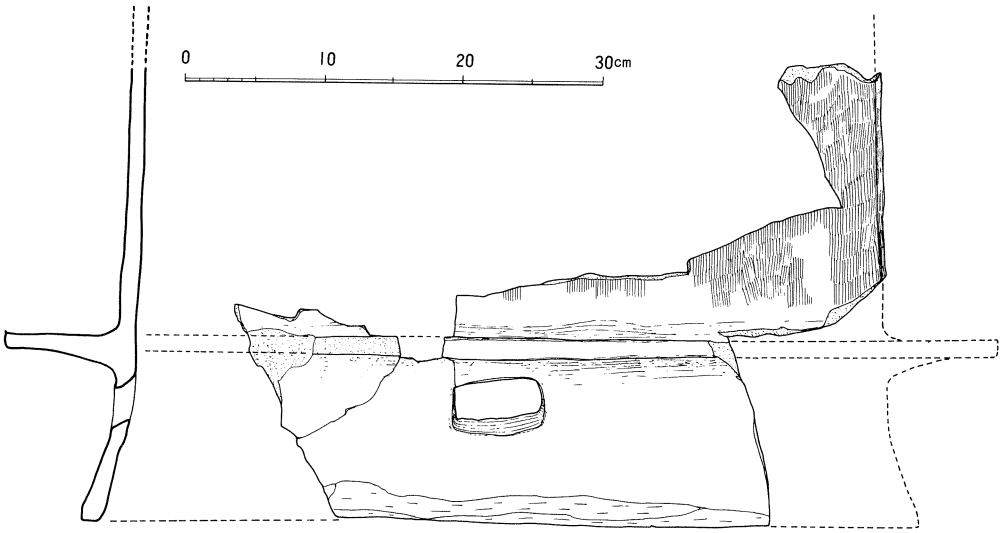
第11図　2－24窯跡A地区灰原断面図

Ⅳ 出 土 遺 物

今回の調査における出土遺物は灰原の全面調査を行なったため、かなりの量となっている。これらの資料については大型甕類・小型のものでは杯蓋・身・高杯・瑞・提瓶・平瓶など各種のものが含まれているが、特異な器形、また桜井谷窯跡群では初見のものなどがある。

２－24窯跡では第12図のものが出土している。当初破片の状態ではこの付近の窯跡で多く出土する陶棺であると考えられた。しかし不安定な長方形のスカシをもつことや、家形埴輪の高床張出し部を思わせる突出部のあることから異形のものであることがわかった。破片の接合により現在判明した形状は、平面形が長方形または方形の直角の角をもち、この周囲に幅８cm・厚さ1.2cmの床状張出し部がつくことである。長方形のスカシは、床状張出し部の下方に斜め下方からあけられたものである。外面張出し部の上方はていねいな縦方向のハケによる整形が施こされ、下方は横位の手ナデによって仕上げている。各端部である下端面・下端外側面・張出し部外端面にはヘラケズリの痕が残る。内面は下方がナデの仕上げであり、上方部には同心円のタタキ目が残る。当初想定した陶棺の場合は内部に床および脚台がつくが、この場合は埴輪状の空洞となる。現在その上部の形状については不明であるが、桜井谷で多く出土する陶棺様の屋根をもつのではないかと考えられる。したがって用途としても墳墓関係のものとなる可能性がつよい。

２－19窯跡では塼が出土している。塼は各面に平行タタキ・同心円タタキ・ヘラケズリなどの痕跡を残すもので、須恵質に焼き締まったものと、黄褐色のもの、計３点が出土し



第12図　２－24窯跡出土遺物

ている。２－25窯跡でも最近多くの塼が出土しているが、これらの使用先については確認されていない。

硯が２点出土している。円面硯で、１点は下部の形状が不明であるが、１点は直径14.3cmの円面に４本の脚がついている。その脚は簡単なもので、ヘラケズリなどにより仕上げている。桜井谷窯跡群での硯の出土は２－10窯跡で鹿島友治氏によって採集された獣足１点があったが、今回の出土品によって２例を追加し、ほぼその製作年代をとらえることができた。[※1] 文字に関した資料として重要なものとされよう。

また直接の文字資料として第15図129の資料が出土している。杯身の底面にヘラ描きしたもので、「利」の字の崩し字である。器形は杯の反転したもので、この窯でも新しい器形に属するものである。この種の遺物としては陶邑ＫＭ234号窯跡からの出土品である陶棺への作者名の記入例があるが、これらとともにヘラ記号文との関連も考慮される必要があろう。[※2]

ヘラ記号文については、２－24・２－19各窯でも多く出土している。整理作業は完了していないが、下表のとおり、ほぼ各窯の比率は示しているものと考えられる。この数字によると各窯とも上方２例が多く、他は非常に少なくなっている。また器種別の内容では、杯が大半を占めその他に提瓶・短頸壺・擂鉢・甕などがみられる。記号文はヘラによる直線の組み合わせのものが多いが、２－19窯にみられる(1)のみは曲線を混えたもので特徴的である。

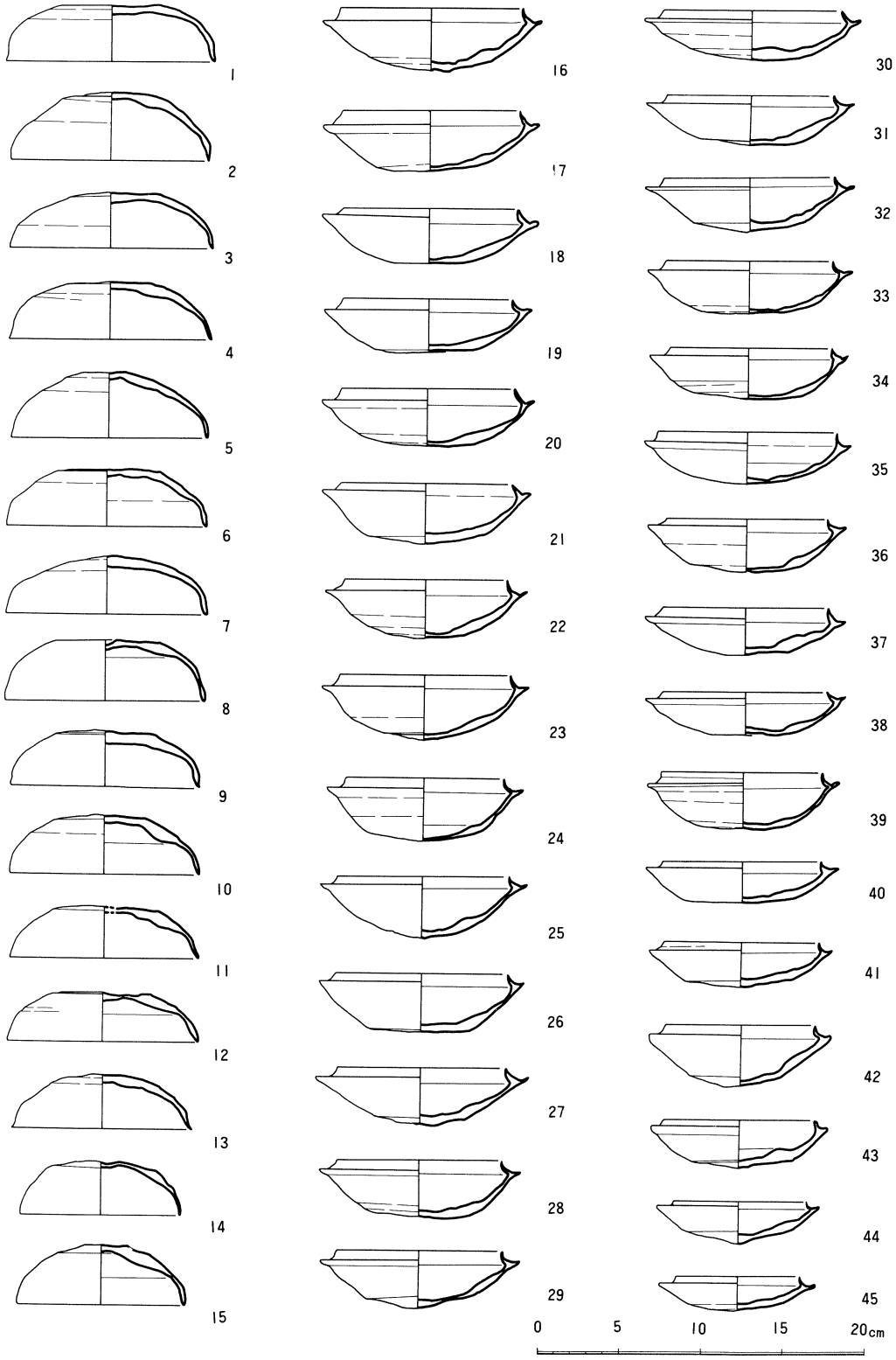
第19図に示す鉄斧が出土している。灰原直上の出土品であるが、ほぼ窯の時期にともなうものと考えられる。

番号	種別	総数	杯			杯以外の器形
			蓋	身	不明	
1	I	15	4	3	7	1　小型カメ
2	II	11	2	6	3	0
3	×	3	1	1	1	0
4	⋇	2	2	0	0	0
5	⋈	1	0	1	0	0
6	ノ＼	1	0	0	0	1　小型カメ
7	不明	11	5	4	1	1
合計		44	14	15	12	3

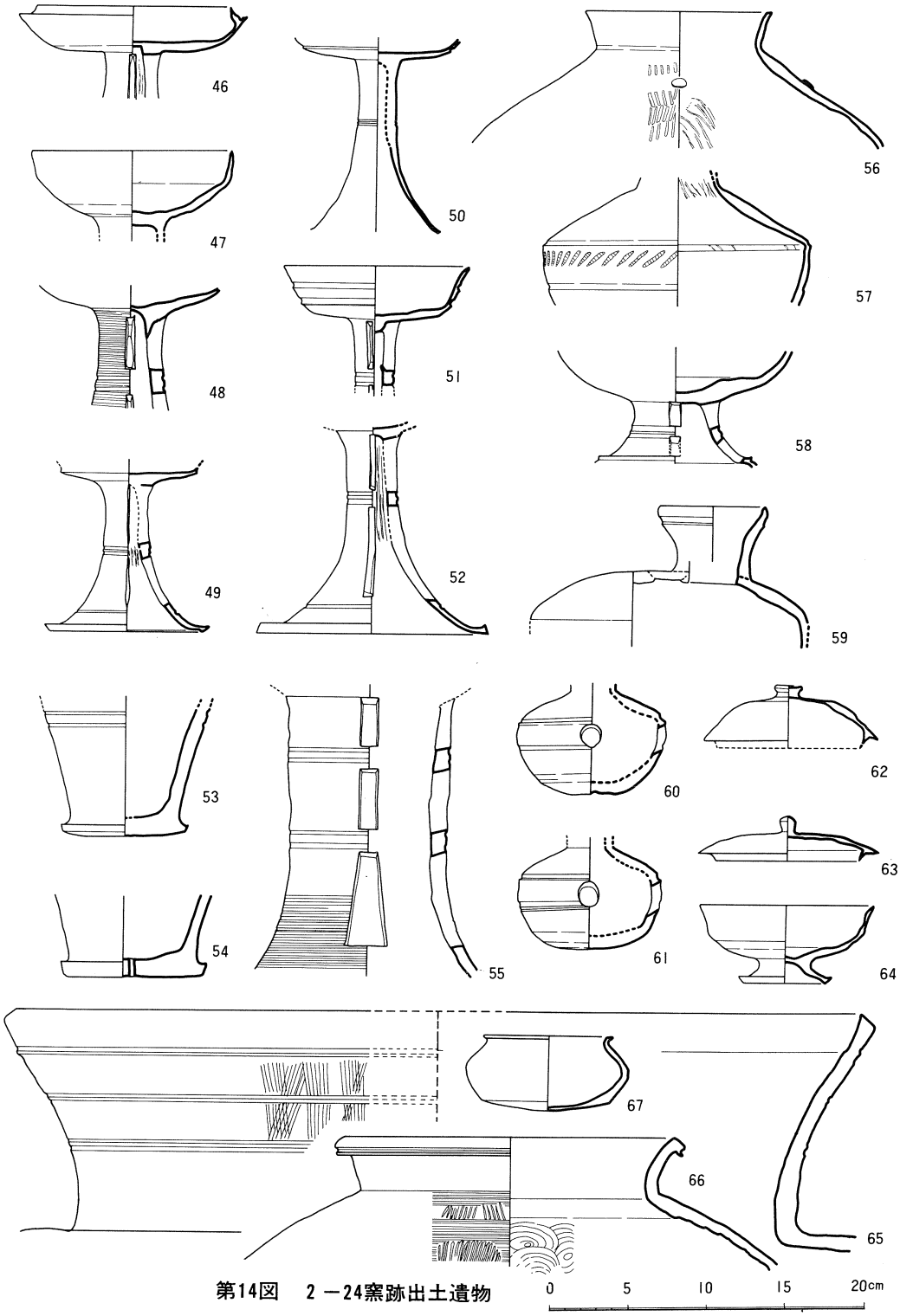
２－24　窯跡ヘラ記号文一覧

番号	種別	総数	杯			杯以外の器形
			蓋	身	不明	
1	Ⅰ	33	15(2)	4	7	7 テイヘイ・短頸ツボ
2	I	31	20	4 (1)	7 (2)	0
3	×	3	1	0	0	2 カメ・テイヘイ
4	III	3	2	0	0	1 高　杯
5	⋕	2	1 (1)	1 (1)	0	0
6	卅	1	0	0	1	0
7	不明	15	5 (1)	3 (1)	5	2 テイヘイ・スリバチ
合計		88	44	12	20	12

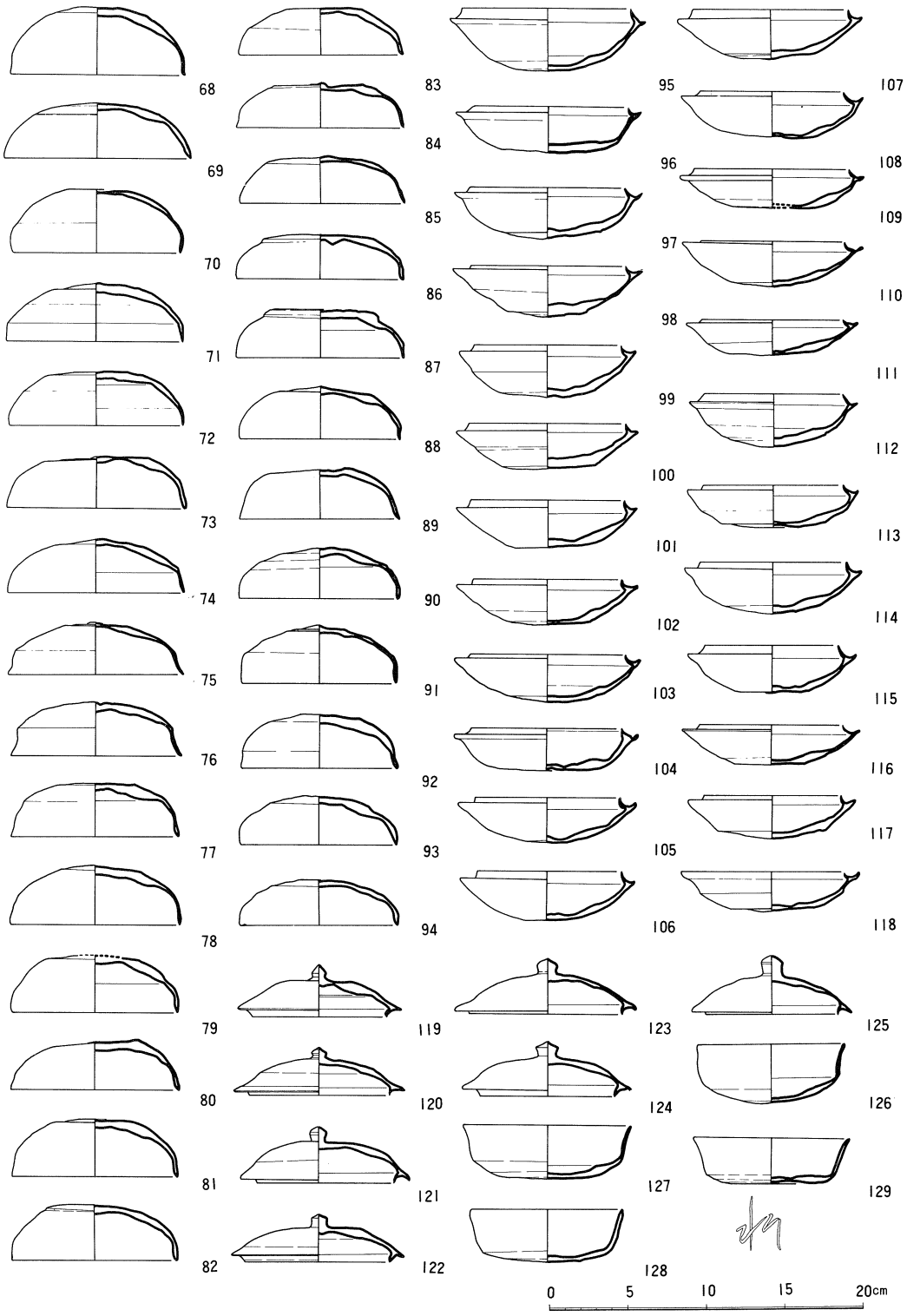
２－19　窯跡ヘラ記号文一覧
( )内は新器種



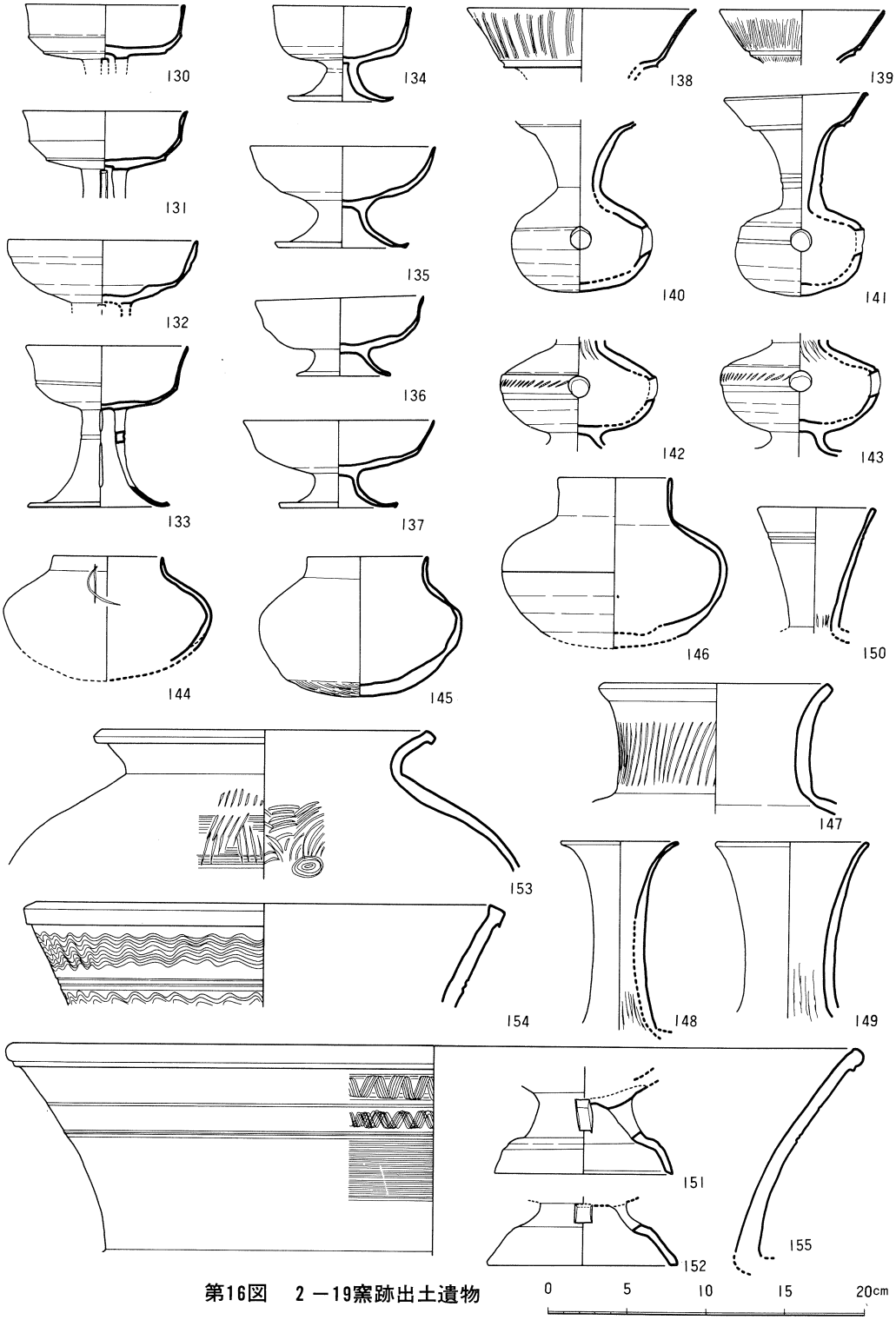
第13図　2 ー24窯跡出土遺物



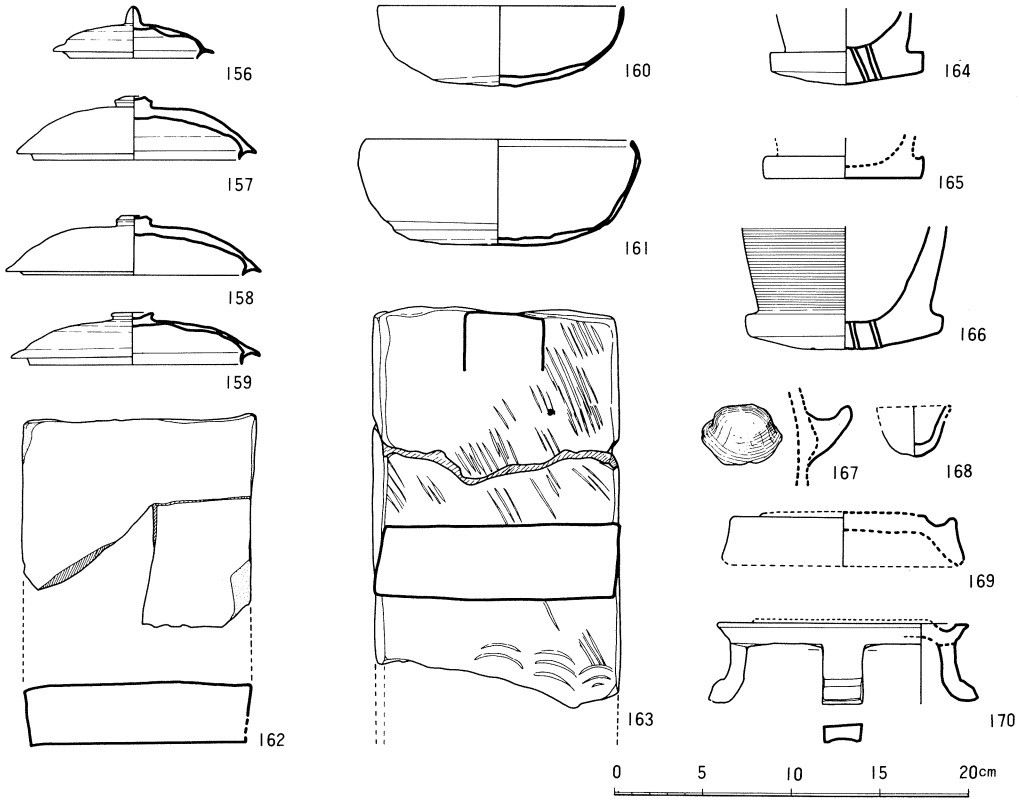
第14図　2－24窯跡出土遺物



第15図　2－19窯跡出土遺物



第16図　2－19窯跡出土遺物

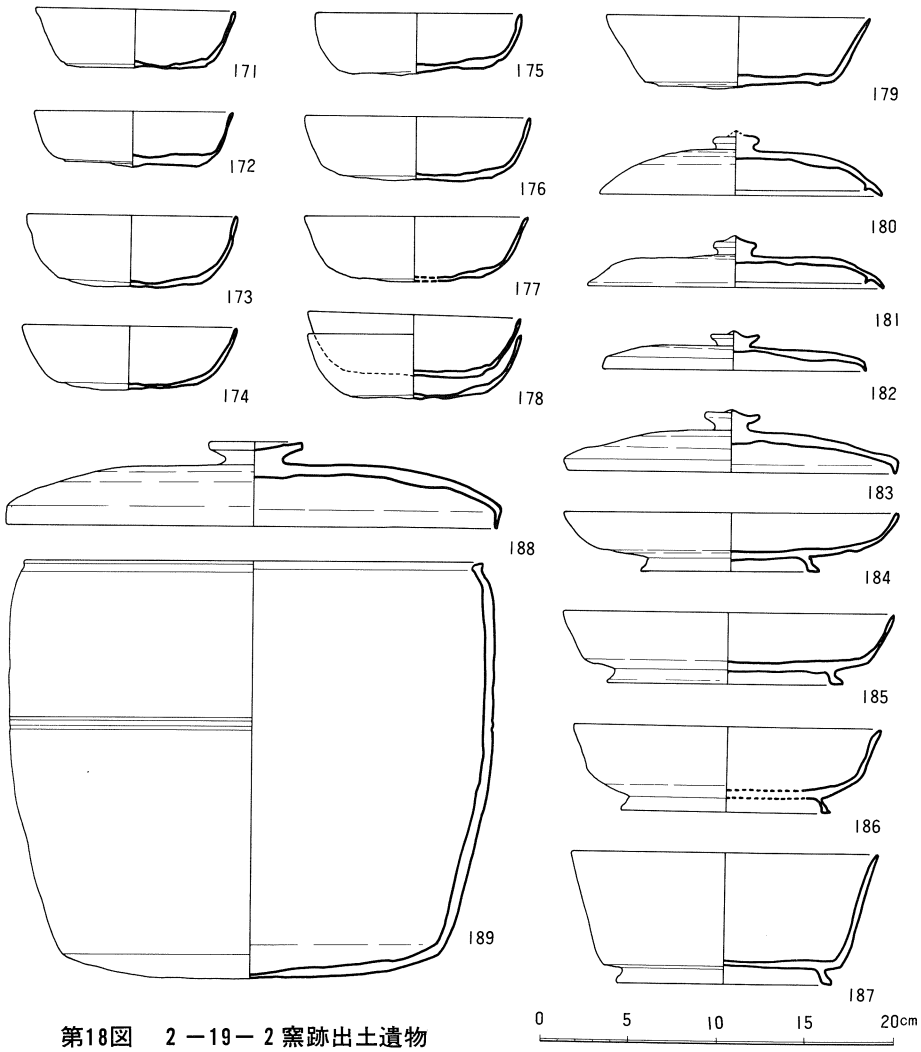


第17図　2－19窯跡出土遺物

2－19－2窯跡では、大型器形として火消壺形土器(18－189)が出土している。この種の器形としては中世に蔵骨器として使用されたものを散見するが、これらの初源期の器形であろう。

灰原地区の全面調査により出土した資料を概観すると、2－24窯と2－19窯のものでは若干の時期差を有している。2－19窯では宝珠つまみをつける蓋形土器が多く出土し、杯身についても平底の器形が出土している。これらは新しい要素をもつ器形であるが、2－24窯ではほとんどこの器形を含んでいない。また高杯についても新しい要素である短く退化した脚台をもつものが2－19窯に多くあり、脚台付の瑳も新しい器形である。これらを陶邑の編年に比定すると、2－24窯は第II期の終末期のものであり、2－19窯は一部第III期に入る時期のものとされる。

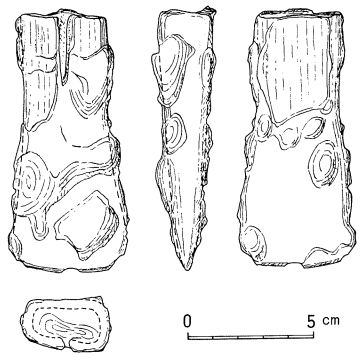
2－19－2窯の時期は、現在まで桜井谷窯跡群で確認されている窯の中では、最も新しいものである。この窯の特徴は、第III期と第IV期をわける蓋のかえりの消失したものと、



第18図　2－19－2窯跡出土遺物

わずかに残存するものが含まれていることであり、この窯の時期を第Ⅲ期と第Ⅳ期の変化点前後に比定できる。2－19－2窯の検出により桜井谷窯跡群の終末期をとらえることができたが、群全体の最盛期である6世紀代の状況がこの窯の時期まで継続していたかどうか疑問である。

2－24窯については、上下に2基の窯を検出し、この上層のものを第1号窯・下層のものを第2号窯とした。灰原ではこれらの窯にともなう資料を



第19図　2－19窯跡出土遺物

2－24窯跡出土遺物一覧表

土器番号	器形	所見
1	杯蓋	口径12.8cm。器高3.5cm。天井部と体部を分ける稜線は消失。天井部はやや扁平。口縁部は外方へ開く。胎土は砂粒を含み、器壁の厚さは、一定している。焼成良好。
2	〃	口径12.3cm。器高4.2cm。天井部は丸く盛り上がる。口径端部は鋭い。胎土は砂粒を多く含む。焼成は不良で灰白色を呈す。左まわりのヘラ削りを器表の½強に、その他は内外面に横ナデ・ナデを行なう。
3	〃	口径12.5cm。器高3.5cm。焼成良好。ヘラ削りは器表の½弱に行なう。ヘラ方向は左まわりである。
4	〃	口径12.5cm。器高3.6cm。天井部に比して口縁部の器壁は薄い。器表外面に自然釉付着。内面は赤褐色を呈す。ヘラ削りは器表の½強に左まわりに行なう。
5	〃	口径12.1cm。器高4.1cm。天井部は丸く盛り上がり、ヘラ記号①がある。天井部と体部は鈍い稜線で区分される。ヘラ削りは左まわりに行なう。焼成は不良で黄白色を呈す。
6	〃	口径12.4cm。器高3.6cm。胎土は大きい砂粒を含む。重ね焼きのため内外面の色調が異なる。ヘラ削りは器表の½に左まわりに行なう。
7	〃	口径12.4cm。器高3.7cm。器表の½強に左まわりのヘラ削りを行なう。
8	〃	口径12.3cm。器高3.8cm。胎土は砂粒を多く含み、赤褐色を呈す。口縁端部に杯身の一部が付着している。
9	〃	口径11.6cm。器高3.5cm。口縁部は肥厚し、端部は鋭くとがる。天井部の整形であるヘラ削りは行なわれていない。
10	〃	口径11.7cm。器高3.7cm。体部の器壁は天井部に比して薄い。焼成は良好で器表外面に自然釉が付着している。ヘラ削りは器表の½弱に左まわりに行なう。
11	〃	口径11.7cm。器高3.2cm。天井部は整形を行なっていない。
12	〃	口径11.8cm。器高3.1cm。天井部と体部の境に鈍い稜が巡る。天井部は無整形である。焼成良好であり、内外面とも赤褐色を呈す。
13	〃	口径11cm。器高3.4cm。口縁端部のつくりは鋭く外方へ開く。ヘラ削りは器表の½に左まわりに行なう。胎土は小石を含み、重ね焼きのため、内外面の色調が異なる。
14	〃	口径9.9cm。器高3.4cm。口径は小型化する。天井部は整形されていない。その他の内外面には横ナデ・ナデを行なう。
15	〃	口径10.5cm。器高3.7cm。整形は14と同じである。
16	杯身	口径11.2cm。受部径13.4cm。器高4 cm。たちあがりは短かく内傾し、受部は外方へ鈍く伸びる。胎土は砂粒を多く含む。ヘラ削りは左まわりに底部の¾強に、その内外面に横ナデを行なう。
17	〃	口径10.8cm。受部径13.3cm。器高3.7cm。器壁は全体的に薄い。たちあがりと受部の端部は鋭どく、ヘラ削りは左まわりに行なう。
18	〃	口径10.7cm。受部径13.2cm。器高3.4cm。器表外面に緑色の自然釉が付着している。
19	〃	口径10.4cm。受部径12.7cm。器高3.4cm。底部に整形はみられない。焼成不良で黄白色を呈す。底部は扁平である。
20	〃	口径10.6cm。受部径13cm。器高3.6cm。たちあがりはやや長く、直線的に内傾する。器表に自然釉が付着している。底部の¾位にヘラ削りを行なう。
21	〃	口径10.4cm。受部径11.8cm。器高3.8cm。器表に緑色の自然釉がかかり、口縁部に杯蓋片が付着している。
22	〃	口径10cm。受部径12.4cm。器高3.6cm。たちあがりは内傾した後、上方にたちあがる。底部の大半に右まわりのヘラ削りを行なう。
23	〃	口径9.5cm。受部径12.7cm。器高 4 cm。器表内面に自然釉が付着している。ヘラ削りは右まわりである。
24	〃	口径9.7cm。受部径12.1cm。器高3.9cm。体部と底部の境に接合痕が残る。底部は無整形である。胎土は大きな砂粒を含み、焼成不良で灰白色を呈す。
25	〃	口径10.5cm。受部径12.7cm。器高3.8cm。底部はやや尖がり気味で、安定感を欠く。器表外面の整形は自然釉が付着しているため不明である。
26	〃	口径10.5cm。受部径12.6cm。器高3.7cm。器表外面に緑色釉が付着している。底部は扁平で口縁部に杯蓋片が付着している。
27	〃	口径10.4cm。受部径13.1cm。器高3.7cm。たちあがりは受部に比して厚く、底部は整形されていない。
28	〃	口径10.2cm。受部径12.1cm。器高3.6cm。たちあがりは内傾したのち端部で直立する。外面の½に左まわりのヘラ削りを行なう。
29	〃	口径10.2cm。受部径12.3cm。器高3.6cm。たちあがりは直立する。底部中央が突出している。外面のヘラ削りは行なわれていない。受部に蓋片付着。
30	〃	口径11.0cm。受部径13.3cm。器高3.1cm。口径に比して器高は低い。底部の大半に左まわりのヘラ削りを行なう。
31	〃	口径10.3cm。受部径12.8cm。器高3.1cm。外面に自然釉が付着している。
32	〃	口径11.6cm。受部径12.9cm。器高3.1cm。たちあがりは内傾する。底部は突出してのこり、ヘラ削りは行なわれていない。
33	〃	口径10.3cm。受部径12.6cm。器高3.3cm。全体に壁器が薄く、たちあがりは内傾して直立する。外面に左まわりのヘラケズリを行なう。

土器番号	器形	所見
34	杯身	口径9.9cm。受部径12.2cm。器高3.2cm。たちあがりは肉厚であり短い。外面にヘラケズリを行なう。
35	〃	口径11.0cm。受部径12.8cm。器高3.2cm。たちあがりは短かく直立する。外面は自然釉付着のために整形法は不明である。
36	〃	口径9.9cm。受部径12.2cm。器高3.3cm。短いたちあがりは内傾し、直立する。外面は自然釉が付着している。
37	〃	口径10.1cm。受部径12.4cm。器高3.0cm。外面に自然釉が付着している。
38	〃	口径10.0cm。受部径12.3cm。器高2.7cm。たちあがりは短く内傾する。外底面のヘラ削りは行なわれていない。重ね焼の痕跡がある。
39	〃	口径10.0cm。受部径11.9cm。器高3.5cm。器壁は全体に薄く、たちあがりは内傾したのち外反気味に歪んでいる。外面に左まわりのヘラ削りを行なう。
40	〃	口径9.8cm。受部径11.9cm。器高2.6cm。たちあがりは肉厚で短く突出する。ヘラ削りは行なわれている。
41	〃	口径9.5cm。受部径11.3cm。器高2.8cm。焼成不良のため赤桃色を呈す。外面のヘラ削りは行なわれていない。
42	〃	口径9.2cm。受部径11.3cm。器高3.8cm。内面中央のナデと外面のヘラ削りは行なわれていない。焼成不良で黄白色を呈す。
43	〃	口径9.4cm。受部径10.9cm。器高3.0cm。受部のたちあがり端部は厚く丸い。外面のヘラ削りは行なわれていなく、中央は突出している。
44	〃	口径8.2cm。受部径10.0cm。器高2.7cm。体・底部の器壁に比してたちあがりは薄い。外面のヘラ削りはなく、中央が突出している。
45	〃	口径7.7cm。受部径9.7cm。高さ2.1cm。径・器高とも小型化している。外底面にヘラ削りがみられる。
46	有蓋高杯	杯部口径12.2cm。受部径14.5cm。器高3.0cm。脚部最小径3.3cm。杯部たちあがりは厚く短い。脚部に幅0.4cm。の２方のスカシがある。内面にしぼり目がみられる。
47	無蓋高杯	杯部口径12.8cm。高さ4.3cm。脚部径4.2cm。口縁端部は上方へ丸く仕あげられている。外面にヘラ削りを行なう。
48	〃	脚部径4.1cm。脚部中段に２本の凹線帯があり、上下に2方のスカシがある。スカシは幅0.6cmのもので上方のものは貫通していない。外面にカキ目の整形が行なわれている。
49	〃	脚部最少径2.6cm。脚高9.5cm。脚端径10.5cm。脚中段に２本の凹線帯があり、上下にスカシがある。スカシはヘラで切りこんだもので、不定間隔で３方にある。
50	〃	脚部最少径2.4cm。脚高約19.5cm。中段に２本からなる凹線帯があるが、スカシはみられない。
51	〃	杯部口径11.9cm。高さ3.3cm。脚部最少径2.5cm。杯部は２本の凹線帯の装飾をほどこしている。脚部中段に２本の凹線帯があり、上下に２方のスカシをもつ。
52	〃	脚部最少径3.2cm。脚端径14.8cm。脚高13.0cm。脚部中段に2 本の凹線帯があり上下２方のスカシがある。下方スカシの下にも１本の凹線がある。脚端部は外反し端面をもつ。
53	すり鉢	底部径8.1cm。底部円板は比較的うすく、鉢部外面に２本の凹線帯がある。底面に左まわりのヘラ削りを行なう。
54	〃	底部径9.2cm。底部円板の厚さは１cmで、中央に１孔をもつ。
55	器台	脚部最少径10.0cm。脚部外面に２本からなる凹線帯が３帯あり、３方３段のスカシがある。脚下半部にカキ目整形をほどこす。
56	壺	口径12.0cm。口縁高2.3cm。肩部の張った短頸の壺である。外面に平行タタキ目、内面に同心円タタキ目があり、胴部外面に円形の浮文がみられる。
57	〃	胴部最大径17.1cm。台付長頸壺と考えられる。肩部に２本の凹線で区切られた文様帯があり、クシ描の列点文がある。
58	〃	台付長頸壺であろう。丸い底部に外方へふんばった高台がつく、台部に２段２方のスカシをもつ。
59	平瓶	口径7.1cm。胴部最大径13.8cm。
60	瓏	胴部最大径9.5cm。器高6.7cm。肩部に２本の凹線による文様帯がある。底部には４方の手持ちヘラケズリが行なわれている。
61	〃	胴部最大径9.2cm。胴部高6.5cm。肩部は高く底部は扁平である。外面に２本の凹線帯があるが、この中の文様はない。胴部中央に径1.3cmの円孔がある。底部に左まわりのヘラ削りを行なう。
62	蓋	受部径11.1cm。器高約4.1cm。高い器体に高さ0.8cm・幅1.8cmの扁平なつまみがつく。器壁は全体に薄く、各端部のつくりは鋭い。
63	〃	口径9.2cm。受部径11.6cm。器高2.9cm。低い器体に高さ１cmの丸いつまみがつく。
64	高杯	口径11.1cm。器高5cm。脚部高1.5cm。杯部は上方に外反し、端部は丸く仕上げる。底部に左まわりのヘラ削りがほどこされる。
65	大型甕	口径63.8cm。口縁部高14cm。口縁部の厚さ1.1cm。大きく外反し、端部は上方につまみ上げる。外面に３本の凹線帯があり、この中にあらいハケ目をほどこす。
66	小型甕	口径22.3cm。口縁部ヨコナデ。胴部外面に平行タタキ目の上にカキ目をほどこす。内面同心円文タタキがある。
67	小型壺	口径9.3cm。最大径10.4cm。器高4.8cm。口縁部は短く外反し、上端部を平にする。内外面ともほとんど整形を行なっていない。

2－19窯跡出土遺物一覧表

土器番号	器形	所見
68	杯蓋	口径11.2cm。器高4.4cm。天井部と体部を分ける稜線は全くなく丸くつづく。内面および体部外面はヨコナデ・ナデの整形がみられるが、天井部のヘラ削りはみられない。ヘラ記号(2)がある。
69	〃	口径12.0cm。器高3.6cm。稜線は全く消失している。天井部にヘラ削りがみられ(1)のヘラ記号がある。焼成不良で黄白色を呈す。
70	〃	口径10.7cm。器高4.1cm。稜線がなく、天井部のヘラ削りは行なっていない。焼成は黄白色の不良なもので、胎土に大きな砂粒を含む。
71	〃	口径11.3cm。器高3.8cm。口縁部が直立気味のもので天井部の整形は行なっていない。小石を含み焼成良好である。
72	〃	口径11.2cm。器高3.5cm。体部と天井部はわずかな角で別かれる。平井部の平担面はヘラ削りが行なわれていない。(2)のヘラ記号がみられる。
73	〃	口径11.5cm。器高3.3cm。扁平な天井部に丸い体部がつく。口縁端部は丸く、整形としてナデ・ヨコナデを行なう。天井部のヘラ削りは行なわない。
74	〃	口径11.3cm。器高3.5cm。天井部に右まわりのヘラ削りがあり、体部は短かく引き出されたものである。焼成良好。天井部に(1)のヘラ記号あり。
75	〃	口径11.2cm。器高3.4cm。天井部の整形はなく、中央が若干突出する。口縁部は外反気味である。
76	〃	口径11.0cm。器高3.4cm。天井部の整形はなく、(2)のヘラ記号あり。
77	〃	口径10.8cm。器高3.4cm。天井部の整形であるヘラ削りは行なわれていない。天井部に(1)のヘラ記号がある。
78	〃	口径10.8cm。器高3.8cm。天井部の整形は行なわれていない。天井部中央をはずれたところに(1)のヘラ記号がある。
79	〃	口径10.6cm。器高3.7cm。天井部の整形は行なわれていない。口縁部は若干内傾する。
80	〃	口径10.9cm。器高3.2cm。扁平な天井部に丸い体部がつく。天井部の整形は行なわれていない。天井部に(1)のヘラ記号がある。白色砂粒を含み、焼成は良好であるが、酸化炎により紫灰色を呈す。
81	〃	口径10.6cm。器高3.7cm。天井部のヘラ削りは行なわれていない。
82	〃	口径10.6cm。器高3.6cm。天井部のヘラ削りは行なわれていない。
83	〃	口径10.5cm。器高3.1cm。天井部のヘラ削りは行なわれていない。酸化炎により暗赤褐色を呈する。
84	〃	口径10.8cm。器高3.0cm。扁平な天井部の中央が突出する。天井部はヘラ削りは、行なわれていない。(4)のヘラ記号がある。
85	〃	口径10.5cm。器高3.1cm。天井部のヘラ削りは行なわれていない。(4)のヘラ記号あり。
86	〃	口径10.7cm。器高2.9cm。天井部のヘラ削りは行なわれていない。天井部から体部の移行点に不自然な段を有する。
87	〃	口径10.8cm。器高3.1cm。扁平な天井部から段をもって体部にうつる。この部分に弱いヘラ削り様の痕跡がみられる。
88	〃	口径10.2cm。器高3.4cm。天井部の中央が若干突出し、整形は行なわれていない。(2)のヘラ記号がある。
89	〃	口径10.3cm。器高3.3cm。天井部の整形であるヘラ削りは行なわれていない。
90	〃	口径10.2cm。器高3.3cm。天井部の整形であるヘラ削りは行なわれていない。
91	〃	口径9.9cm。器高3.7cm。天井部から体部の移行点は角張っている。広い天井部には整形のヘラ削りは行なわれていない。
92	〃	口径9.9cm。器高3.4cm。天井部から体部へは自然に移行する。天井部に(2)のヘラ記号がみられる。
93	〃	口径10.0cm。器高3.1cm。天井部の整形は行なわれていない。
94	〃	口径10.1cm。器高2.9cm。天井部の整形は行なわれていない。中央に(2)のヘラ記号がある。
95	杯身	口径10.8cm。受部径12.6cm。器高4.1cm。本窯跡においては大型のもので、外面½に左まわりのヘラ削りが行なわれている。他はナデ・ヨコナデの整形を行なう。焼成は不良で白色のものである。
96	〃	口径9.9cm。受部径11.8cm。器高3.0cm。口縁部は受部付近で大きく外反し、たちあがりをつくる。各端部鋭く仕上げられている。底部のヘラ削りは行なわれていない。その他の面にはヨコナデ・ナデを行なう。
97	〃	口径9.9cm。受部径11.0cm。器高3.4cm。焼成は良好であるが、若干酸化色を呈する。底部の整形はないが、他はヨコナデを行なう。
98	〃	口径9.8cm。受部径12.1cm。器高3.3cm。底部に比して体部の器壁は非常に薄く2㎜足らずである。受部は厚く、たちあがりは薄い。胎土に砂粒を含む。底部の整形はなく他はナデ・ヨコナデを行なう。

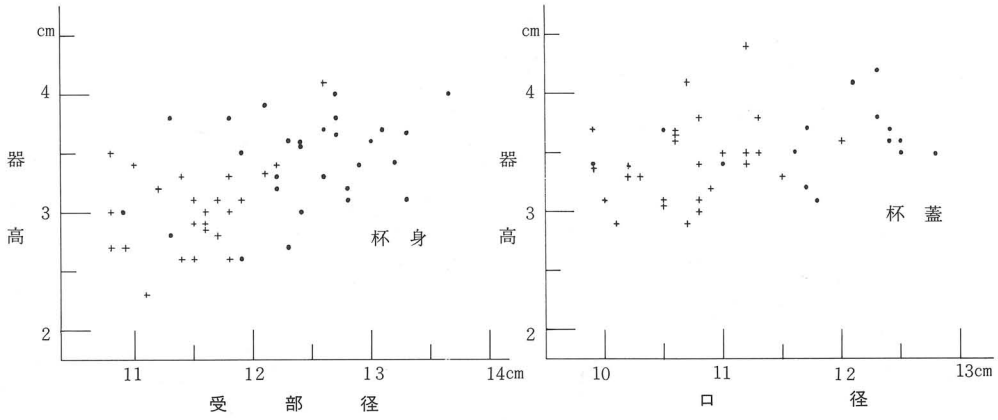
土器番号	器形	所見
99	杯身	口径9.3cm。受部径11.2cm。器高3.4cm。受部は体部の延長線上にあり、端部は丸い。たちあがりは薄く短かい。底部の整形はなく、他はナデ・ヨコナデの整形。
100	〃	口径10.0cm。受部径11.6cm。器高3.0cm。体部は平らな底部から約35°の角度でまっすぐ外上方にのびる。体部に弱いヘラ削り状の痕跡あり。
101	〃	口径9.8cm。受部径11.5cm。器高3.0cm。器表外面に自然釉付着
102	〃	口径9.5cm。受部径11.6cm。器高2.9cm。底部に整形はなく。体部下端に弱いヘラ削りが左まわりに巡る。その外の面にナデ・ヨコナデを行なう。
103	〃	口径9.9cm。受部径11.9cm。器高3.1cm。器壁の厚さは口縁部から底部までほぼ均等である。胎土は砂粒を多く含む、焼成は良好で青灰色を呈する。
104	〃	口径9.6cm。受部径10.8cm。器高2.7cm。器壁は厚いもので、たちあがりも厚いものである。底部は整形痕がなく、体部はナデ・ヨコナデを行なう。
105	〃	口径9.4cm。受部径11.5cm。器高2.9cm。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で青灰色を呈す。内面にヘラ記号(2)がみられる。底部整形痕はなく、他にナデ・ヨコナデをおこなう。
106	〃	口径9.3cm。受部径11.2cm。器高3.2cm。受部は薄い。器表外面は釉付着し、整形不明。
107	〃	口径9.8cm。受部径11.8cm。器高3.3cm。外面自然釉付着のため整形不明瞭。
108	〃	口径9.1cm。受部径11.7cm。器高3.1cm。胎土は砂粒を多く含み。焼成良好であるが、灰白色を呈する。底部の整形は行なわれていない。他はナデ・ヨコナデを行なう。
109	〃	復原口径9.9cm。復原受部径11.8cm。器高2.6cm。胎土に大きい石を含み、焼成は良好で灰色を呈する。底部の左まわりのヘラ削りを行なう。
110	〃	口径9.3cm。受部径11.6cm。器高2.9cm。胎土は砂粒を多く含み焼成良好で青灰色を呈する。底部の整形痕はなくヘラ記号(1)がみられる。
111	〃	口径9.1cm。受部径11.1cm。器高2.3cm。たちあがりの内傾度は大きく、受部との比高差はほとんどない。底部にヘラ記号(1)がある。
112	〃	口径8.8cm。受部径10.8cm。器高3.5cm。焼成は良好である。天井部に(2)のヘラ記号がある。
113	〃	口径9.0cm。受部径10.9cm。器高2.7cm。体部と口縁部の内外面にヨコナデが施こされている。他は無整形である。
114	〃	口径9.4cm。受部径11.4cm。器高3.3cm。口縁部に杯蓋の破片が付着している。器表外面に釉が付着している。
115	〃	口径8.6cm。受部径10.8cm。器高3.0cm。小型化した器形である。
116	〃	口径9.2cm。受部径11.5cm。器高2.6cm。器表内面は青灰色、外面は自然釉が、かかっている。底部にヘラ記号(1)がある。
117	〃	口径8.7cm。受部径11.7cm。器高2.8cm。底部の整形はなく、中央が突出している。たちあがりは受部に比して薄いつくりである。
118	〃	口径9.3cm。受部径10.5cm。器高2.6cm。たちあがりは短かく、その先端は受部より低い。胎土に砂粒を含む。
119	杯蓋	口径8.6cm。受部径10.5cm。器高3.4cm。つまみ径1.2cm。受部のかえりは口縁端部の下方へ突出する。
120	〃	口径10.0cm。受部径12.0cm。器高3.1cm。つまみ径1.0cm。受部のかえりは短かく下方に垂直にのびる。天井部左まわりのヘラ削りを行ない、中央につまみがつく。焼成良好である。
121	〃	口径8.8cm。受部径10.9cm。器高3.6cm。つまみ径1.2cm。丸味を帯びた天井部につまみがつく。器表外面に自然釉がかかり、重ね焼の痕跡がみられる。
122	〃	口径9.1cm。受部径11.1cm。器高3.1cm。つまみ径1.1cm。口縁部に重ね焼の痕跡がある。胎土は良好である。
123	〃	口径9.8cm。受部径11.6cm。器高3.6cm。つまみ径1.4cm。つまみは、やや扁平なものである。
124	〃	口径8.6cm。受部径10.8cm。器高3.6cm。つまみ径1.5cm。器表外面に釉が付着し整形は不明である。
125	〃	口径8.4cm。受部径10.3cm。器高3.8cm。つまみ径1.4cm。器形は天井部と体部の境界は明瞭でなく、弧形である。器体に対してつまみが大きい。
126	杯身	口径9.4cm。器高3.7cm。体部は底部から垂直にのび口縁部で若干外反する。底部は丸く、ほぼ全面にヘラ削りを行なう。他の部分はヨコナデ・ナデの仕上げを行なう。
127	〃	口径10.7cm。器高3.5cm。胎土に白色の砂粒を含む。底部のほぼ全面に右まわりのヘラ削りを行なう。
128	〃	口径9.7cm。器高3.4cm。胎土に砂粒を含み、焼成は不良で灰白色を呈する。底部全面に左まわりのヘラ削りを行なう。
129	〃	口径10.0cm。器高3.0cm。底部全面にヘラ削り、他にヨコナデを行なう。重ね焼の痕跡がみられる。底部にヘラ描きの文字(利)がある。

土器番号	器形	所見
130	無蓋高杯	杯部口径10.1cm。同高3.5cm。脚部は剝離している。平たい底部に左まわりのヘラ削りを行なう。
131	〃	杯部口径10.5cm。同高3.8cm。脚部に２方のスカシがある。体部には２段の稜線があり、口縁部は端部で外方に開く。
132	〃	杯部口径12.1cm。同高4.0cm。脚部は剝離しているが２方にスカシをもつものである。杯部は稜のないものである。
133	〃	杯部口径10.3cm。同高4.0cm。器高10.3cm。脚端径9.1cm。脚部一本の凹線があり、この上下にヘラで切り裂いた２方のスカシがある。杯部の体底部の境に退化した凹線をもつ。底部に左まわりのヘラ削り。
134	〃	杯部口径8.9cm。同高3.5cm。器高6.1cm。脚端径6.8cm。脚部の小型化したものである。
135	〃	杯部口径11.8cm。同高3.5cm。器高6.5cm。脚端径8.6cm。杯部は丸く全く稜がないもので、底部付近にヘラ削りを行なう。脚部は大きく外方に開く。焼成は不良で酸化色を呈す。
136	〃	杯部口径10.7cm。同高3.3cm。器高5.2cm。脚端径6.1cm。脚部は低い台状のものである。
137	〃	杯部口径12.2cm。同高3.4cm。器高5.6cm。脚端径7.6cm。焼成は良好であり、灰色を呈する。底部にヘラ削りがあり、(4)のヘラ記号がある。
138	瓿	口径14.4cm。口縁部高3.9cm。瓿の口縁部と考えられる。大きい口縁部で、頸部との境に凹線による稜がある。口縁部外面に縦方向のクシによる装飾文がある。
139	〃	口径10.5cm。口縁部高3.0cm。外面全面にハケによる調整がある。
140	〃	体部最大径8.9cm。体部高6.6cm。口縁部を欠失するものである。底部に左まわりのヘラ削りを行なう。肩部に弱い凹線状の段を有する。
141	〃	体部最大径8.2cm。体部高5.5cm。器高12.9cm。口径9.2cm。肩部に２本の凹線があり、頸部に２本の凹線文がある。
142	〃	体部最大径9.9cm。体部高5.6cm。脚台付の瓿である。肩部に２本の凹線帯があり、この中にクシ描列点文による装飾を施こす。底部にヘラ削りを行なう。
143	〃	体部最大径10.1cm。体部高5.6cm。脚台付の瓿である。底部に左まわりのヘラ削りを行なう。
144	短頸壺	体部最大径13.2cm。口径7.0cm。肩部に(1)のヘラ記号がある。
145	〃	体部最大径12.8cm。口径7.7cm。器高9.9cm。底部に手持ちのヘラ削りを行なう。他はヨコナデの仕上げを行なう。釉がつき焼けひずみがある。
146	〃	体部最大径14.3cm。口径7.3cm。底部に左まわりのヘラ削りを行なう。体部最大径付近に一条の細いヘラによる線が巡る。
147	壺口頸部	口径14.9cm。口縁部高7.0cm。頸部外面に弱いヘラによる斜線文がみられる。体部内面に同心円文が残る。
148	〃	口径7.5cm。口頸高11.9cm。細く長い頸部に口縁部が外反するものである。全面ヨコナデにより仕上げている。下方内面にシボリ目が残る。台付長頸壺であると考えられる。
149	〃	口径9.8cm。口頸高10.7cm。高さに比して太いものである。口縁部は外反し丸く終る。台付長頸壺のものと考えられる。
150	〃	口径7.5cm。口頸高7.6cm。小型のもので、口縁部下に２本の弱い凹線がある。全面ヨコナデ仕上げであり、下方内面にシボリ目が残る。台付長頸壺のものと考えられる。
151	脚台	脚高7.0cm。脚端径11.4cm。各稜は丸く痕跡的である。スカシは３方に開くもので間隔は不規則である。台付長頸壺のものと考えられる。
152	〃	脚高4.0cm。脚端径12.1cm。２方に開くスカシをもつものと考えられ、稜はなく丸く仕上げられている。台付長頸壺のものと考えられる。
153	甕	口径21.7cm。口縁部高2.8cm。端部は肥厚し丸い。胴部は外面平行タタキ目・内面同心円文仕上げで、外面にカキ目がみられる。
154	〃	口径30.5cm。口縁端部は四角いもので面をもつ。口縁外面の中央に２本の凹線が巡り、この上下に波状文がある。
155	〃	口径54.2cm。口縁部高13.3cm。口縁端部は丸い仕上げであり、外面に凹線文があり、２帯の波状文帯があり、下方はヨコナデの上をカキ目で仕上げる。胴部接合面で剝離している。
156	蓋	口径7.2cm。受部径9.1cm。器高3.0cm。つまみ径1.0cm。全体に薄い良好な作りであり、乳房状のつまみをつける。天井部に左まわりのヘラ削りを行ない中心をはずれて(5)のヘラ記号をもつ。
157	〃	口径11.7cm。受部径13.6cm。器高3.7cm。つまみ径2.1cm。大型の蓋であり、扁平なつまみをつけるものである。
158	〃	口径12.5cm。受部径14.5cm。器高3.4cm。つまみ径2.0cm。大型の蓋で扁平なつまみをもつものである。受部のかえりは弱い。
159	〃	口径12.1cm。受部径14.2cm。器高3.0cm。つまみ径2.5cm。つまみの高さは0.3cmの薄いもので中央が凹状になる。天井部に左まわりのヘラケズリを行なう。
160	鉢	口径13.9cm。器高4.6cm。底部からつづく体部は器壁の薄い良好な作りである。口縁部はヨコナデ・底部内面ナデ・外面ヘラ削りを行なう。口縁端部は丸く仕上げる。

土器番号	器形	所見
161	鉢	口径15.0cm。最大径16.0cm。器高6.1cm。底部から外反する体部は口縁部で内傾する。全体に薄いつくりでヨコナデ・ナデの仕上げを行なう。底部は左まわりのヘラケズリを行なう。
162	塼	幅13.0cm。厚さ3.5cm。燃成は須恵質になった良好なもの。である。表裏は不定方向の平行タタキ目がある。側面左側はタタキ目で他はヘラで切った痕が残る。
163	〃	幅13.6cm。厚さ4.3cm。燃成は不良で黄白色を呈する。外面に斜位の平行タタキ目があり、一部には同心円文タタキ目もみられる。他にもう一点同様のものが出土している。
164	すり鉢	底部径8.8cm。厚さ1.1cm。底部に斜め方向の孔か4箇所みられる。底部はあらい手持ちのヘラケズリを行ない、他はヨコナデの仕上げを行なう。
165	〃	底部径9.2cm。厚さ1.3cm。底部面に小さな刺突痕が多くみられる。
166	〃	底部径11.3cm。厚さ1.3cm。底部円板は明瞭な整形痕がなく、中央に1個とその外周に5個の孔がある。体部外面はカキ目の仕上を行ない、内面はヨコナデの仕上げである。
167	把手	壺等の把手の剝離したものである。全体に作りは丸いものである。
168	手捏ね土器	口径約4.3cm。器高約3.0cm。ミニュチアの手づくりのものである。燃成不良で黄白色を呈する。
169	円面硯	口径13.7cm。海の部分は幅約1.2cmの小型のものであり、下部構造は不明である。
170	〃	口径14.3cm。器高約4.8cm。円面の海の部分と脚を残すものであり、復原の結果4脚のものと考えられる。脚は下端が外反するものでヘラ削りにより仕上げられている。

2－19－2窯跡出土遺物一覧表

土器番号	器形	所見
171	杯身	口径11.3cm。器高3.4cm。平たい底部に外反する体部をもつもので薄く仕上げられている。底部の整形は行なわれていない。他はヨコナデ・ナデの仕上げ。焼成やや悪く灰白色を呈する。
172	〃	口径11.2cm。器高3.2cm。底部に比して体部壁は薄い。底部の整形なく裏面からみて左まわりに粘土紐の接き目が残る。灰白色を呈する。
173	〃	口径11.9cm。器高4.1cm。燃成不良で黄色を呈する。整形不明。
174	〃	口径12.2cm。器高3.7cm。底部と体部の境は丸い。燃成不良で黄色を呈する。
175	〃	口径11.7cm。器高3.6cm。底部に整形なく、他はヨコナデ・ナデの仕上げを行なう。裏面からみて左まわりの粘土紐の接き目痕がある。燃成はやや不良で灰色を呈する。
176	〃	口径12.8cm。器高3.7cm。燃成不良で黄色を呈し、整形不明。
177	〃	口径約12.6cm。器高3.7cm。燃成不良で黄色を呈する。整形不明。
178	〃	口径10.0cm。10.0cm。器高3.5cm・3.7cm。ほぼ同じ大きさの器形を重ね燃いたものである。他に4枚の重ね焼例も知られる。
179	〃	口径15.0cm。器高4.0cm。底部から体部への境は角があり、直線的に外上方にのびる。燃成不良で赤褐色を呈する。
180	蓋	受部径16.0cm。器高3.7cm。つまみ径2.7cm。内面に受部かえりをもつもので、扁平で中央の突出したつまみをもつ。天井部に左まわりのヘラ削りを行なう。燃成不良で黄褐色を呈する。
181	〃	受部径16.8cm。器高3.0cm。つまみ径2.5cm。天井部は扁平であり、左まわりのヘラ削りを行なう。受部のかえりは小さく短かいものである。
182	〃	受部径15.0cm。器高2.3cm。つまみ径2.8cm。扁平な器形であり、受部内面のかえりは消失し、端部を下方へまげるものである。天井部に左まわりのヘラ削りを行なう。
183	〃	受部径19.0cm。器高3.7cm。つまみ径3.1cm。受部は端部を折りかえしたものである。天井部に左まわりのヘラ削りを行なう。
184	盤	口径18.9cm器高3.4cm。高台径10.1cm。高さ2.6cmの器体部に0.8cmの高台がつくものである。
185	〃	口径18.7cm。器高4.1cm。高台径13.4cm。底部左まわりのヘラ削りを行ない、他はヨコナデ・ナデの仕上を行なう。
186	〃	口径17.5cm。器高4.9cm。 高台径11.9cm。(復原数値)体部下半から底部にかけて左まわりのヘラ削りを行なう。
187	杯	口径17.4cm。器高7.5cm。高台径12.3cm。高台のついた平らな底部から直線的に口縁部につづく。
188	火消壺形土器	受部径27.9cm。器高4.9cm。つまみ径5.4cm。つまみ高1.4cm。大型の蓋形土器である。口縁端部はヨコナデ、天井部は左まわりのヘラ削りを行なう。
189	〃	口径25.9cm。体部最大径27.4cm。底部径21.3cm(復原数値)。器高23.7cm。底部は左まわりのヘラ削りを行なう。体部中央に2本の弱い凹線文がある。燃成不良で軟質である。

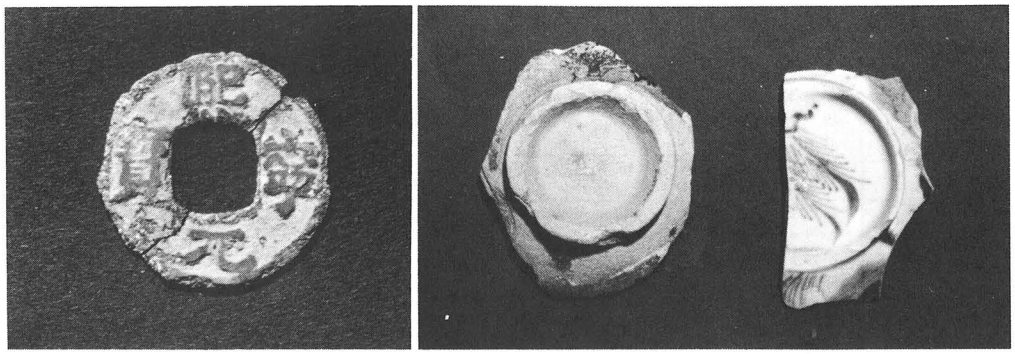


（＋印２－19窯跡 ●印２－24窯跡）

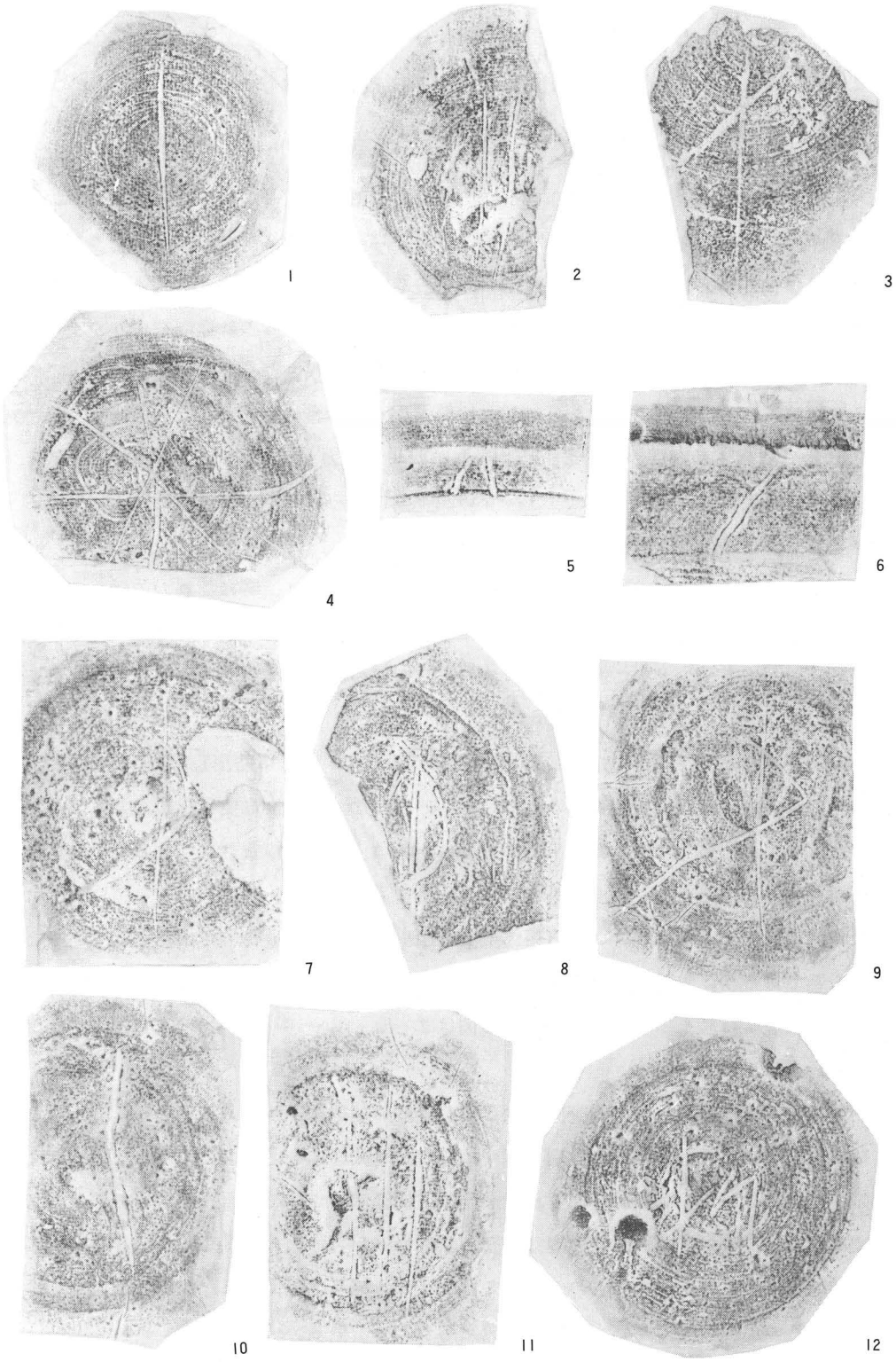
第20図　杯における大きさの比較

明瞭に分層することができなかったが、一部窯体および焚口の灰層において分層することができた。これらをみると、杯蓋では第13図６・９が第２号窯にともなうものであり、同11・14・15が第１号窯にともなうものである。杯身では同図29・31・38が第２号窯、同41・42・44・45が第１号窯にともなうものである。これらの資料をみると口径の大きいものから小さいものへ変化していることがわかる。しかし、この間に灰原などの出土資料を埋めると、明瞭な一線を引くことはできない。このことから、２－24窯の２重構造は断絶したものではなく、第２号窯の壊れたものを第１号窯として修築し、継続して使用したものと考えることができる。

その他の遺物として各窯とも陶磁器と宋銭が出土している。この付近の現在に致る水田開発の時期をうかがうことができる。



第21図　中　世　遺　物



1～6　2－24窯　跡

7～12　2－19窯　跡

0　5　10cm

第22図　ヘラ記号文および文字拓本

V　ま　と　め

桜井谷窯跡群は豊中市遺跡分布図に26個所の土器散布地として記録されているが、現在でも未確認地において窯跡の発見されることや、未記録のまま消滅したものが多数であることなどを考慮すれば、この数より倍ぐらいの数があったものと考えられる。しかし、これらの中で正式な発掘調査が行なわれて記録に残されているものは数例であり、その他は丘陵部の開発により消滅し、現在数個所の土器散布地が残されているにすぎない。このように桜井谷窯跡群は群の構成など細部の検討が全く行なわれないままに消滅したものであるが、今後は残る数個所の窯跡の保存や資料の収集に努力することが重要な課題とされよう。

今回の調査のまとめとしては、数少ない調査例によって明らかになった窯の立地点およびこれらの構築法などの問題に触れておきたい。

桜井谷は千里川の形成する段丘が比較的発達した所であり、窯はこれらの段丘斜面や千里川に流れこむ小さな川が形成した谷の斜面に構築される場合が多い。今回の発掘調査例も段丘斜面にあり、ともに夫婦池から流れ出る支谷の出口に相対し、主谷に面して構築されている。

２－19窯跡は支谷出口の南側にあり、斜面はこの部分が円形に凸出したような場所となり、凸出部中央の斜面に直交して築かれている。一方、２－24窯跡は支谷出口の北側にあり、斜面は幅広く凸出した形となり、この中央に斜面に直交して構築されている。両者の窯の斜面角度は異なっており、上下平担面間の比高にも差があり、地形が異なっている。しかし両者に通じてみられることは斜面凸出部の中央に、斜面に直交して構築されているということであろう。すなわち窯を中心として地形を概観すれば、等高線は左右対称に山側にゆるく入りこむ形をとっている。同様な例は２－２・２－10・２－18・２－23窯跡などでも確認されている。※3

窯体の構築法においても調査例が少なく、群内の状態は不明である。先年調査した２－18窯跡は残存した天井部から地山を掘り抜いた地下式構造をもつものであることが明らかにされた。２－19－２窯跡は保存状態が悪く、構築法については言及できない。２－19・２－24窯跡については、断面の観察や壁の状態などから地山の掘りこみに天井部を架設した半地下式の構造を有するものと考えられた。窯体部下半の側壁は、すべて地山が下地となり、この上にスサ入り粘土が貼られ還元層となっている。

天井部の架設については、この下地となる骨組みが必要であるが、２－24・２－19窯で

はこれにあたると考えられる窯壁内の炭化木を検出している。今回の調査では保存との関係で窯体部の調査は細かく実施していないが、骨組みなど構築法については、保存状態の良い窯の細かい解体作業を実施する必要がある。

２－24窯跡の調査では、良好な状態で前庭部を検出した。この前庭部は斜面に掘りこまれたもので、面積は約4.7m²位の比較的狭い部分で、両側は凹地、前方は斜面となる。２－19窯跡では現在の水路で前庭部が切断されていたが、地形からみると同程度の面積であると考えられる。前庭部は土器焼成のためには最も重要な作業場であると考えられるが、両者に見られるものは比較的狭い部分である。斜面下には平担面があるが、これらにみられる前庭部は中腹に作られている。このような位置での窯入れや窯出し、焼成に必要な薪の運搬などの作業は、すべて斜面の上下運動という形態をとることになる。このような作業形態においても窯体が中腹以上に築かれていることから、斜面の中での窯体の位置決定は作業形態より窯の機能という面に重点が置かれていたことがわかる。言いかえれば窯体は上方煙道部の位置から決定されたものとも考えられる。

一方、前庭部下方に展開する灰原については、前庭部が中腹に作られていることが好条件であろう。すなわち土器焼成にともなって生じる灰の掻き出しは、前庭部を越せば自然に下方に流れ落ちることになる。灰原の分布は、自然な流れとして前庭部から扇形に広がるものと考えられる。窯体が斜面に直交して築かれている２－19および２－24窯跡では窯体の主軸と灰原の主軸は同一のものと考えられる。しかし、今回の調査では両窯ともこれとは異なり、２－19窯跡ではすべて灰が右側斜面に広がっていた。２－24窯跡では右側と左側に分布し、右側に多くみられた。これらの結果から灰の掻き出し作業は前庭部から何らかの道具の使用により左右に出すことが多かったのではないかと考えられる。

以上今回の調査により感じた若干の問題点を列記してみたが、桜井谷窯跡群の調査例の少ないことはこれらを結論づけることに大きな障害となる。また窯体の立地点などについては陶邑古窯跡群中にはこれらに該当しない地形上のものが多くあるように見受けられ、今後、立地点の微地形についての観察も重要な課題とされよう。

※１　藤澤一夫氏「古墳文化とその遺跡」（『豊中市史』第１巻、昭和36年）

※２　中村浩氏「須恵器窯での他器種の焼成」（『陶邑Ⅰ』大阪府文化財調査報告書第28輯、昭和51年、大阪府教育委員会）

※３　豊中市教育委員会『下村町池窯跡』昭和49年・豊中市教育委員会『桜井谷窯跡群―範囲確認調査―』昭和52年

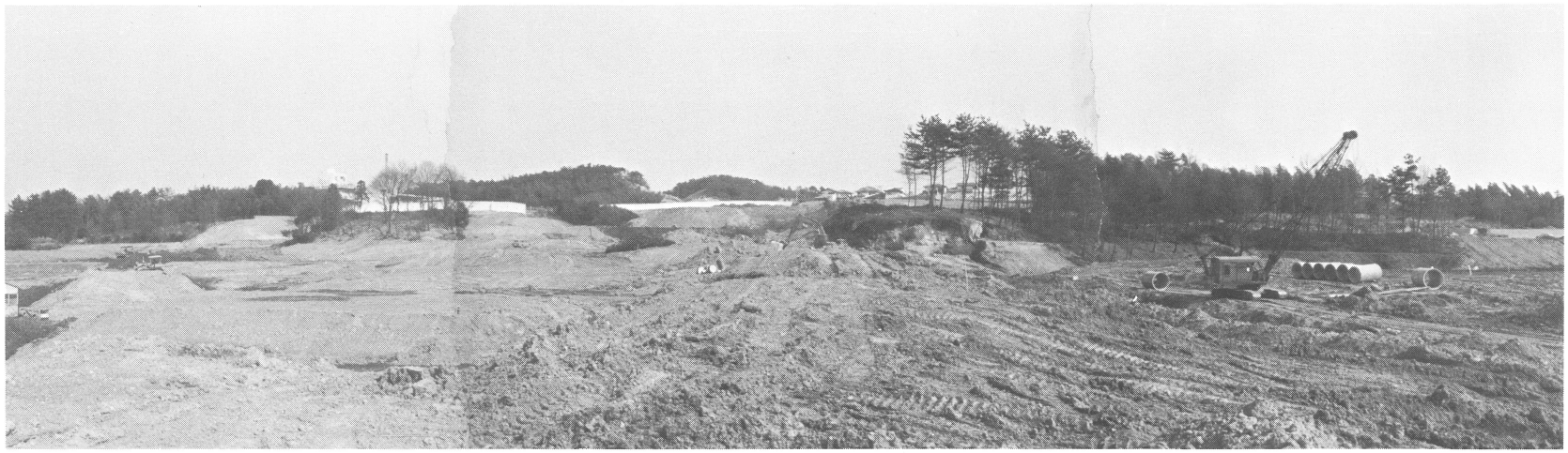
（造成前）

2—24窯跡

2—19窯跡

2—19—2窯跡

（造成中）



図版一　発掘調査区域全景

図版2　2—19窯跡灰原分布地域

図版3　2—19窯跡窯体の状態〈後方より（上）・前方より（下）〉

図版4　2—19窯跡灰原の状態

図版5　2—24窯跡B地区窯体・前庭部の状態（後方より）

図版6　2—24窯跡C地区窯体後方部の状態

図版7　2—24窯跡C地区窯体の断面（二重構造）

図版8　2—24窯跡A地区灰原の状態